勞働者があり餘つてゐる處からばかりでなく、勞働者の不足してゐる處からも逃げ去るものである。例へば、ブロンニツキイ市外地帶は、モスクワ縣の他の市外地帶からと他の諸縣からと一、一二五人の勞働者を吸引し、同時に一、二四六人の勞働者をもつと工業の發達したモスクワ市外地帶やボゴロードスキイ市外地帶へ出してやつた。それ故に勞働者が出て行く理由は、『土地の仕事を手許に』有たないと云ふにあるのではなくして、もつと有利な處へ行かうとするにある。この事實は如何に初歩のものであつても、このことを更にも一度餘分に民衆派——經濟派に言ひ聞かせる妨げとなるものではない。彼等民衆派——經濟派は、土地の仕事を理想化し、出稼營業を非難し、資本主義の作る住民の移動性の進歩的意義を無視してゐるのである。

大機械精工業と前行工業形態とを區別する前記の特質的要點を一言で要約すると、それは勞働の綜合統一であると言へる。實際、大なる國民的及び國際的市場を相手とする生産も、國内の各地域やその他の各國との間に原料品及び補助材料を買ひ込む爲に生ずる密接な商業關係の發達も、大なる技術的進歩も、大企業による生産と住民との集中も、家長生活の陳腐な傳統打破も、住民の移動創造も、需用と勞働者の發達との水準高上も——これ等は悉く資本主義的進

歩の要素である。資本主義的進歩は、國内生産と、それから同時に生産參加者とを益々統一して行くものである。

（註。最後の三章に述べた資料は、吾人の見解によると、次の如きことを示してゐる。即ちマルクスによつて與へられた工業の資本主義的形態と階程との分類は、現在傳播されてゐる分類よりも、即ち粗工業と工場とを混同し、買占人の爲め勞働を工業の特別形態中に入れて了ふ所の（ヘール、ビューヘルの）分類よりも、遙かに正しく、遙かに充實してゐる。粗工業と工場工業とを混同することは、純外部的特徴を分類の基礎とし、資本主義の粗工業時代と機械時代とを區別する技術や經濟や生活狀況などの根本的特異點を觀過することを意味するものである。資本主義的家内作業に關して言へば、この家内作業は、疑ひもなく資本主義的工業の有機體内に於て、極めて重要な役割を演じてゐる。買占人の爲の作業は、家内資本主義に取つて特質的であるが、（小さからぬ範圍に於て）資本主義發達の最も種々なる時代にもまた見られることも疑ひない。買占人の爲の作業を資本主義發達の或る時期に、若くは或る階程にある全工業組織と關連せしめずに、この作業の意義を理解することは出來ない。田舍の小店商人の注文

により籠を編む農民も、ザヴィヤロフの注文により家庭でナイフの柄を造るパヴロヴォ村の造柄職人も、大工場主若くは大商人の注文により衣類や履物や手袋などを縫ひ箱を貼る女工も――これ等は皆買占人の爲に働いてゐる者であるが、資本主義的家内作業は、これ等の凡ての場合に於て、種々なる性質と種々なる意義とを有つてゐる。勿論、吾人は例へば資本主義前の工業形態を研究したビューヘルの功績を否定するものではないが、たゞ彼のなした資本主義的工業形態の分類を正しいものと認めないまでゞある。吾人はストルーヴェの見解にも（一八九八年の『ミール・ポーヂイ』第四號參照）同意することが出來ない。それは彼がビューヘルの說を採用して、（前記の如き學說の部分に於て）これをロシアの『家内工業』に當て篏めてゐるからである。（ストルーヴェ氏は吾人がこの數行を書いた後――一八九九年に――遂にその科學的及び政治的發達の周期を終つて了つた。彼はビューヘルとマルクスとの間に、自由主義經濟と社會主義經濟との間に動搖してゐたが、遂に純粹の自由主義的ブルジョアとなつた。この數行を書く吾人は、社會民主々義から斯の如き要素を極力一掃することに援けたことを誇りとする。第二版の註。）

ロシアに於ける大機械精工業と資本主義の爲の國内的市場との關係に關する問題に從ふと、

〔前記の資料は、斯の如き結論に導いて來る。ロシアに於ける工場制工業の迅速なる發達は、生産資料（建築材料、燃料、金屬及びその他）に對する廣大な、そして益々擴大される市場を造り、個人的需用品でなく、生産需用品の製作に從事してゐる住民の仕事範圍を特に急速に擴大する。然し個人的需用品に對する市場も、大機械精工業の生長の結果、迅速に擴大される。この大機械精工業は、益々多くの住民を農業から引離して商工業の仕事に引きつける。工場生産品に對する國内市場に關して言へば、この市場成立の過程は、本書の初めの章に於て詳述された。

第八章　國內市場の形成

こん度吾人の爲に殘されてゐることは、前章に於て瞥見した資料の總計算と、國民經濟の種々なる範圍に於ける資本主義的發達の相互關係に關する觀念を纏めようとする試みとである。

一　商品流通の生長

周知の如く、商品の流通は、商品生産に先んじて、この商品生産の發生條件の一を（然し唯一の條件ではない。）成してゐる。吾人は本勞作に於て、商品生産並に資本主義生産に關する解剖にその題目を制限した。從つて改革以後のロシアに於ける商品流通の生長に就いての重大問題を詳述するつもりではない。國内市場の迅速なる生長に關する一般的觀念を纏めるには、左の如き簡單な指摘で十分である。

ロシアの鐵道網は、一一八六五年の三、八一九キロメートルから一八九〇年の二九、〇六三キロメートルまで生長した。（註。『世界經濟の上層』（ユーバアジヒテン・デル・ウエルトウイルトシャフト）一、『一九〇四年には歐露に於て五四、八七八キロメートル（ポーランド王國、カフカズ及びフィンリャンディヤを含む。）アジア・ロシアに於て八、三五一キロメートルであつた。』第二版の註。）即ち七倍以上に增大したの

である。イギリスはもうと長い期間に於て（一八四五年—四、〇八二キロメートル、一八七五年—二六、八一九キロメートル。増加六倍）ドイツはもつと短い期間に於て（一八四五年—二一、一四三キロメートル、一八七五年—二七、九八一キロメートル。増加一二倍。）これに相應する進歩を遂げた。一年間に開通されれ鐵道の延長は、時期が異るに從つて、甚だしく動搖してる。例へば、一八六八年—一八七二年の五年間には、八、八〇六露里開通されたが、一八七八年—一八八二年の五年間には、僅かに二、二二露里しか開通されなかつた。（註。ヴェ・ミハイロスキイ著『ロシアに於ける鐵省網の發達』一八九八年發行。第二號）この動搖量に從つて、勞働者に對する需用を或は擴大し、或は縮小する資本主義に取つて、如何に尨大な失職者豫備軍が必要であるかを判斷することが出來る。ロシアに於ける鐵道敷設の發達には、二大勃興時期があつた。即ち六十年代の終り（並に七十年代の始め）と九十年代の後半とである。一八六五年から一八七五年までに於けるロシア鐵道網の年平均延長は、千五百キロメートルであつたが、一八九三年から一八九七年までの年平均延長は、約二千五百キロメートルであつた。

鐵道に依る貨物輸送は、左の如き量を示した。一八六八年十四億三千九百萬プード、一八七

三年―十一億一千七百萬プード、一八八一年―二十五億三千二百萬プード、一八九三年―四十八億四千六百萬プード、一八九六年―六十一億四千五百萬プード、一九〇四年―百十億七千二百萬プードである。（編輯者註。一九〇四年度資料は、第二版に於て增補されたもの。）乘客輸送もこれ以上に迅速に發達した。一八六八年―千四十萬人、一八七三年―二千二百七十萬人、一八八一年―三千四百四十萬人、一八九三年―四千九百四十萬人、一八九六年―六千五百五十萬人、一九〇四年―一億二千三百六十萬人である。（註。『陸軍統計集』五一一頁。ヱヌ――オン氏の『概觀』附錄。『生產力』十七卷、六八頁。『財政通報』一八九六年、第四三號。『ロシア年報』一九〇五年、サンクト・ペテルブルグ市。一九〇六年。（編輯者註。本文に於ける一九〇四年度資料と、註に於ける一九〇五年度資料とは、第二版に於て增補されたもの。））

水路交通輸送の發達は、左の如くである。（ロシア全體に關する資料。）（註。『陸軍統計集』四四五頁。『生產力』十七卷、四二頁。『財政通報』一八九八年。四四號。）

年次	汽船		汽船でない船の數	積載量（單位百萬プード）			船價（單位百萬留）			船員數	
	數	蒸汽力		汽船	汽船でない船	合計	汽船	汽船でない船	合計	汽船の	汽船でない船の	合計
一八六八	六四六	四七、三一三	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
一八八四	一、一四六	七二、一〇五	二〇、〇九五	六、一	三六三	三六八、一	四八、九	三二、一	八一	一八、七六六	九四、〇九九	一二三、八六五
一八九〇	一、八二四	一〇三、二〇六	二〇、一二五	九、二	四〇一	四一〇、二	七五、六	三八、三	一二三、九	二五、八一四	九〇、三五六	一二六、一七〇
一八九五	二、五三九	一二九、七五九	二〇、五八〇	一三、三	五二六、九	五三九、二	九七、九	四六、〇	一四三、九	三二、六八九	八五、六〇八	一三八、二九七

歐露の內地水路による貨物輸送量は、一八八一年—八億九千九百七十萬プード、一八九三年—十一億八千百三十萬プード、一八九六年—十五億五千三百萬プードである。これ等貨物の價格は、一億八千六百五十萬留—二億六千七百二十萬留—二億九千萬留である。

ロシアの商船隊は、一八六八年には、汽船五一隻、その積載量一萬四千三百ラスト（譯者註。一ラストは約二噸。）帆船七〇〇隻、その積載量四萬一千八百ラストから成り立つてゐたが、一

八九六年には、汽船五二二隻、その積載量十六萬一千六百ラストに達した。（註。『陸軍統計集』七五八頁。『大藏省年報』一の三六三頁。『生産力』十七卷、三〇頁）

外海諸港による商業行航の發達は、左の如くである。一八五六年—一八六〇年の五年間入港船舶數は、平均一八、九〇一隻宛で、その積載量三、七八三、〇〇〇噸であつた。一八八六年—一八九〇年間平算二三、二〇一隻（＋23％）積載量一三、八四五、〇〇〇噸（＋266％）で、つまり積載量は三2/3倍に增加した譯である。三九年間（一八五六年から一八九四年まで）に、積載量は五、五倍に增加した。のみならず、若しロシアの船舶と外國船舶とを區別すれば、前者の數はこの三九年間に三、四倍に（八二三から二、七八九に）增加し、その積載量は、一二、一倍に（一二、八噸から一、三六八噸に）增加した譯である。所が、後者の數は、一六％だけ（一八、二八四隻から二一、一六〇隻に）增加し、その積載量は五、三倍に（三、四四八、〇〇〇噸から一八、二六七、〇〇〇噸に）增加した。（註。『生産力。ロシアの對外貿易』五六頁以下。）茲に注意すべきことは、出入船舶の積載量が、矢張り非常に著しく動搖してゐる點である。（例へば、一八七八年—一千三百萬噸、一八八一年—八百八十萬噸）然るにこの動搖によ

り、一面黑色勞働者、港灣勞働者及びその他に對する需用に動搖が起ることが出來る。資本主義は此處に於ても常に仕事を要求し、その仕事が如何に恒久的でなくても、要求されると直ぐにそれに取りかゝらうとする多數の人々の存在を要求する。

對外貿易の發達は、次の如き資料によつても明白である。(註。同上、一七頁。(編輯者註。一九〇四年度『ロシア年報』サンクト・ペテルブルグ市。一九〇五年。第二版へ附加。))

年次	ロシアの人口 フィンランドを除く (單位百萬人)	輸出入額合計 (紙幣留)	一人に對する外國貿易取引額 (單位一留)
一八五六—一八六〇	六九、〇	三一四、〇	四、五五
一八六一—一八六五	七三、八	三四七、〇	四、七〇
一八六六—一八七〇	七九、四	五五四、二	七、〇〇
一八七一—一八七五	八六、〇	八五一、一	九、六六
一八七六—一八八〇	九三、四	一、〇五四、八	一一、二九

一八八一—一八八五	一〇〇、六	一、一〇七、一	一一、一〇〇
一八八六—一八八九	一〇八、九	一、〇九〇、三	一〇、〇二
一八九七—一九〇一	一三〇、六	一、三二一、四	一〇、一一

銀行の運轉金額と資本の蓄積額とに關しては、次の如き資料が一般的觀念を與へる。國立銀行の貸出總額は、一八六〇年—一八六三年の一億一千三百萬留（一八六四年—一八六八年の一億七千萬留）から一八八四年—一八八八年の六億二千萬留に增加したが、當座預金額は、一八六四年—一八八八年の三億三千五百萬留から一八八四年—一八八八年の十四億九千五百萬留に增加した。（註。『ロシアの調査報告集』一八九〇年。一〇九。）貸附貯蓄合名會社や貸附貯蓄金庫（農村及び工業共に）の運轉金額は、一八七二年の二3/4百萬留（一八七五年の二千百八十萬留）から一八九二年の八千二百六十萬留（一九〇三年の一億八千九百六十萬留）（註。『ロシアの調査報告集』一八九六年。表、一二七。（編輯者註。本文中の一九〇四年度の調査報告は、第二版に增補されたもの。））まで增加した。土地所有の負債は、一八八九年から一八九四年ま

で次の如き金額に於て增加した。即ち抵當に入れた土地の評價は、十三億九千六百萬留から十八億二千七百萬留に上り、貸出金額は、七億九千百萬留から十億四千四百萬留までに上つた。(註。同上。)貯蓄金庫の營業は、特に八〇年代及び九〇年代に發達した。一八八〇年には七五庫が算へられた。一八九七年には、四、三一五の金庫(その中三、四五四は郵便電信局金庫)が算へられた。一八八〇年には預金が四百四十萬留、一八九七年には一二億七千六百六十萬留であつた。年末の殘額は、一八八〇年が九百萬留、一八九七年が四億九千四百三十萬留であつた。資本金の年增額から云ふと、飢饉の年なる一八九一年及び一八九二年(五千二百九十萬留及び五千五十萬留)と最近の一二年(一八九六年—五千百六十萬留。一八九七年—六千五百五十萬留)とが、特に擢ん出てゐる。(註。『財政通報』一八九八年。二六頁。)

最近の調査報告は、貯蓄金庫の更に大なる發達を示してゐる。一九〇四年にはロシア全體に於て貯蓄金庫は六、五五七で、預金者數は五百十萬人、預金總額は十一億五百五十萬留であつた。序に言つて置くが、我國の古い民衆派と社會主義に於ける新日和見主義者等は、貯蓄金庫の生長が『國民の』境遇の向上して來た兆候であると云ふやうな(優しく言ふと)極めて無邪

氣なことを一度ならず言つた。それ故に餘分ながらこれ等の金庫への預金のロシアに於ける割當（一九〇四）とフランスに於ける割當（一九〇〇―一九〇一年、第一〇號の報告）とを比較して見ることとする。

ロシアに於て、

預金量	預金者數（單位一千人）	%	預金額（單位百萬留）	%
二五留以内	一、八七〇、四	三八、七	一一、二	一、二
二五―一〇〇留	九六七、七	二〇、〇	五二、八	五、四
一〇〇―五〇〇留	一、三八〇、七	二八、六	三〇八、〇	三一、五
五〇〇留以上	六一五、五	一二、七	六〇五、四	六一、九
合計	四、八三五、五	一〇〇	九七七、四	一〇〇

フランスに於て、

預金量	預金者數（單位千人）	%	預金額（單位百萬法）	%
一〇〇法以内	五、二七三、五	五〇、一	一四三、六	三、三
一〇〇—五〇〇法	二、一九七、四	二〇、八	四九三、八	一一、四
五〇〇—一、〇〇〇法	一、一三、八	一〇、六	七二〇、四	一六、六
一、〇〇〇法以上	一、九四八、三	一八、五	二、九七九、三	六八、七
合計	一〇、五三三、〇	一〇〇	四、三三七、一	一〇〇

この表の中に民衆派——修正派——立憲民主派の議論を辯護する材料は、何れだけあるであらうか！殊に興味があるのは、ロシアに於ける預金が、矢張り預金者の仕事と職業により一二の部類に區別されてゐることである。結局預金の最も多いのは、農業と農村營業とで、二億二千八百五十萬留となる。そしてこれ等の預金は、特に迅速に生長してゐる。田舍は文明化しつゝある。百姓を破産させることに從事するのが、益々有利になりつゝある。

然し吾人の最も近い題目に歸らう。吾人は資料が商品の流通と資本の蓄積との大なる生長を證明してゐるのを見る。而して資本を注ぎ込む場所は、國民經濟の凡ての部門に於て、如何にして組織されたか、または商業資本は如何にして工業資本に化したか、即ち如何にして商業資本は生産に投ぜられ、生産參加者の間に資本主義關係を造つたか——これ等は既に前に述べた所である。

二　商工業住民の生長

吾人がこれまで述べて來た所は、農業住民を基礎とした精工業住民の生長が、凡ての資本主義社會に於て必然的な現象であると云ふことである。工業と農業とが如何に漸次分離したかと云ふこと——これも既に瞥見した通りである。で、まだ殘つてゐるのは、たゞこの問題に就いて總決算を下すだけである。

（一）　都市の生長

前記の過程の最も明瞭な表現となつてゐるのは、都市の生長である。改革以後の時代の歐露（五〇縣）に於けるこの生長に關する資料を左に掲げる。（註。一八六三年度の『年報統計』（一。一八六六年）及び『陸軍統計集』の數字。オレンブルグ縣並にウファ縣の都市住民の數字は、都市表により訂正されてゐる。これによると、我國の都會住民の合計は、六百十萬五千百人で、『陸軍統計集』の示すやうに六百八萬七千百人ではない。一八八五年度の『一八八四年—一八八五年度全露調査報告集』の資料。一八九七年度の一八九七年一月二八日の人口調査による數字。（『一八九七年の第一回全露人口調査』中央統計委員會發行。サンクト・ペテルブルグ市。一八九七年。第一部及び第二部）都市常住者は、一八九七年の調査によると、千百八十三萬五百人、即ち一二・五五％に當る。吾人は都市の實際の人口を擧げたのである。一八六三年—一八八五年—一八九七年間の資料が、完全に同種類のもので、これを比較し得ると云ふことに就いては、吾人の保證の限りでないことを斷つて置く。それ故に吾人は、たゞ最も一般的關係の比較に滿足し、大都市に關する資料を取り扱ふことにしよう。）

年次	歐露に於ける住民（單位千人）				都市住民の割合								
	總數	都市に	市外地帶に		左の如き人口を有する都市の數					大都市の人口但し左の如き人口を有するもの（單位千人）			
					二十萬人以上	十萬人乃至二十萬人	五萬人乃至十萬人	大都市合計		二十萬人以上	十萬人乃至二十萬人	五十萬人乃至	合計
一八六三	六一、四二〇、五	六、一〇五、一	五五、三一五、四	九、九四	二	一	一〇	一三	八九一、一	一、八五四、八	一一九、〇	六八三、四	一、六九三、四
一八八五	八一、七二五、二	九、九六四、六	七一、七六〇、四	一二、一九	三	七	二	二一	一、八五四、八	九九八、〇	一、三〇二、七	四、一五五、五	三、一〇三、七
一八九七	九四、二二五、四	三、〇二七、一	八二、一八八、三	一三、七六	五	九	三〇	四四	三、一三八、一	一、一七七、〇	一、九八二、四	六、三九七、五	四、二六六、一

斯樣に都市住民の割合は、不斷に生長してゐる。即ち農業から商工業への住民の離脱が行はれてゐるのである。（註。『農業的性質を有つた市街地の數は、餘り多くないが、これ等の市街地の住民數は、都會人の總數に比較すると、全く微々たるものである。』グリゴーリエフ氏著

『農業の影響と穀物の値段。』第三巻、一一六頁）都市は他の住民より二倍も速かに生長する。即ち一八六三年から一八九七年まで全人口は五三、三％増加し、農村住民は四八、五％増加し、都市住民は九七、〇％増加した。十一年間に（一八八五年―一八九七年間に）『都市へ流れ込んだ農村住民の最小限度は、』ヴェ・ミハイローフスキイ氏により二百五十萬人と算定された。（註。『ノーヴォエ・スローヴォ』一八九七年、六月、一三頁）即ち一年にすると、二十萬人以上になる。

それ自體大精工業中心地及び商工業中心地となつてゐる都市の住民は、一般の都市住民よりも遙かに速かに生長する。五萬またはそれ以上の人口を有する都市の數は、一八六三年から一八九七年までの間に、三倍以上に（一三から四四に）なつた。一八六三年には、都會人の總數中から僅かに二七％ばかりが、（六百十萬人から百七十萬人が）一八八五年には、約四一％が（九百九十萬人から四百十萬人が）（註。グリゴーエフ氏は表を擧げてゐる。（一の一四〇）その表に依つて見ると、一八八五年には、都市總數の八五・六パーセントは、二萬人以内の住民を有し、その住民中三八・〇パーセントは都會人であつた。都市總數の一二・四パーセント（六六〇の

中八二）は二千人以内の住民を有し、その中都會人は、都會人總數の僅かに一・一パーセント（九百九十六萬二千人中十一萬人）に過ぎなかつた。）斯の如き大中心地に集中されてゐたが、一八九七年には、既に半數以上、即ち約五三％（千二百萬人中六百四十萬人）に達した。斯くして假令六〇年代に於て都市住民の性質が、主として餘り大きくない都市の住民によつて限定されてゐたとしても、一八九〇年代には大都市は、完全な勝利を獲得した。一八六三年に最も大きかつた一三都市の住民は、百七十萬人から四百三十萬人までに、即ち一四四％に增加した。然るに都市の全住民は、僅かに九七％しか增加しなかつたのである。それ故に大精工業中心地の大生長と、幾多の新中心地の形成とは、改革以後の時代に於ける最も特質的な兆候の一である。

（二）國內植民の意義

吾人が既に前に指摘した通り、（第一章、第二節）理論は、農業住民を基礎として精工業住民が生長する法則を作り出す。それは、工業に於て可變資本は必ず生長するが、（可變資本の生長

は、工業勞働者數の生長と全商工業住民の生長とを意味する。）農業に於ては、『或る地區を開拓する爲に要求される可變資本は、必ず減少する』と云ふ事情から生ずるものである。『それ故に農業に於ける可變資本の生長は、新らしい土地が耕作される時にのみ可能であるが、これもまた非農業住民の更に大なる生長を豫想する。』と、マルクスは附け加へてゐる。これによつて、精工業住民の生長の現象をその純粹の姿に於て觀察し得るのは、吾人が既に一片の空地なき既に植民された地域をその眼前に有つ場合に限ることが明白である。資本主義により農業かち衝き離された斯の如き地域の住民に取つて、工業中心地に移住するか、それとも他の地へ移住するかする以外に活路はないのである。然しながら若し吾人の前にまだ凡ての土地が占領されず、まだ凡ての土地に人が住んでゐないやうな地域があれば、事態は根本的に變つて來る譯である。植民された地帶に於て農業から衝き退けられた斯の如き地域の住民は、この地域の中のまだ人の住まぬ部分へ移つて、『新らしい土地の開拓に』取りかゝることが出來る。茲に農業住民の生長が起るのである。而してこの生長は、（或る期間には）精工業住民の生長以上でないにしても、以下の速力で進むやうなことはない。吾人はこの場合二つの異つた過程を自分の

前に有つてゐる。即ち（一）植民された舊い地方若くはその地方の一部に於ける資本主義の發達と（二）『新らしい土地』に於ける資本主義の發達とがそれである。第一の過程は、組織された資本主義的關係が、將來益々發達して行くことを表示し、第二の過程は、新らしい地域に於ける新資本主義關係の形成を表示するものである。第一の過程は、資本主義の內部への發達を意味し、第二の過程は、その外部への發達を意味する。この二つの過程を混同すると、住民を農業から商工業に引き抽いて行く所の過程に就き必ず誤つた考へを有つやうになることは明白である。

改革後のロシアは、この兩過程が全く同時に現はれたことを吾人に示してゐる。改革以後の時代の初期に於て、即ち六〇年代に於て、歐露の南部地方及び東部地方は、著しき程度に於て、人口の稀薄な地域であつた。この地域に向つて、中央の農村ロシアから一大移民の流れが進んで行つた。新らしい土地に於ける新農業住民の形成は、これと併行して進んでゐる所の農業から工業への住民の脫出を或る程度迄困難ならしめた。前記の如きロシアの特質を都市住民に關する資料に從つて明瞭に思考する爲には、歐露の五〇縣を個々の部類に細分する必要があ

歐露の縣別	縣の數	住民（單位千人）一八六三年 總數	村落	都市	一八九七年 總數	村落	都市	都市住民の割合 一八六三	一八九七	一八六三年から一八九七年までの住民增加の割合 合計	農村住民	都市住民
一、首都の縣	二	三、七三八、四	一、六八〇、〇	一、〇五八、四	四、五四一、〇	一、九八九、七	二、五五一、三	三八、二	五六、二	六五	一八	一四一
二、工業縣及非農業縣	九	九、八九〇、七	九、一六五、六	七二五、一	一二、七五一、八	一一、六四七、八	一、一〇四、〇	七、三	八、六	二九	二六	五二
首都の縣、非農業縣及工業縣合計	一一	一三、六二九、一	一〇、八四五、六	一、七八三、五	一七、二九二、八	一三、六三七、五	三、六五五、三	一四、一	二一、一	三六	二五	一〇五
三、中央農業諸縣、小ロシア諸縣及中部ヴオルガ諸縣	一三	二〇、四九一、九	一八、七九二、五	一、六九九、四	二八、二五一、四	二五、四六四、三	二、七八七、一	八、三	九、八	三八	三五	八七
四、ノヴオロシイスク縣ヴオルガ下流及東部諸縣	九	九、五四〇、三	八、四七二、六	一、〇六七、七	一八、三八六、四	一五、九二五、六	二、四六〇、八	二、一	九、二	九二	八七	一三四
以上四部類の總計	三三	四二、六六一、三	三八、一一〇、七	四、五五〇、六	六三、九三〇、六	五五、〇二七、四	八、九〇三、二	一〇、五	一三、九	四九	四四	九五、六
五、パルチック沿岸諸縣	三	一、八一二、三	一、六〇二、六	二〇九、七	二、三八七、〇	一、七八一、六	六〇五、四	二一、五	二五、三	三一	一一	一八八
六、西部諸縣	六	五、四八八、五	四、九四〇、三	六〇八、二	一〇、一二六、三	八、九三一、六	一、一九四、七	一〇、九	一一、八	八二	八八	九六
七、西南諸縣	三	四、四八三、七	四、九八二、八	五〇〇、九	九、六〇五、五	八、六九三、〇	九一二、五	九、一	九、五	七五	七四	八二
八、ウラル諸縣	二	四、三五九、二	四、二六五	一四一、七	六、〇八六、〇	五、七九四、六	二九一、四	三、二	四、七	三九	三七	一〇五
九、極北諸縣	三	一、五五五、五	一、四六二、五	九三、〇	二、〇八〇、〇	一、九六〇、〇	二二〇、〇	五、九	五、八	三三	三四	二九
總計	五〇	六一、四二〇、五	五五、三一五、四	六、一〇五、一	九四、二一五、四	八二、一八八、二	一三、〇二七、二	九、九四	一二、七六	五三、三	四八、五	九七、〇

部類別されてゐる縣は左の如し、（一）ペテルブルグ及びモスクワ兩縣、（二）ウラヂーミル、カルガ、コストローマ、ニゼゴーロド、ノウゴーロド、プスコフ、スモレンスク、トウエーリ及びヤロスラーヴリの諸縣、（三）ヴオロネーヂ、カザニ、クールスク、オルロフ、ペンザ、ポルタワ、リヤザン、サラトフ、シムビルスク、タムボフ、トウーラ、ハリコフ及びチエルニーゴフの諸縣、（四）アストラハン、ベツサラービヤ、ドン、エカテリノスラフ、オレンブルグ、サマラ、タウリーツ、ヘルソン及びウフアの諸縣、（五）クルリヤンヂヤ、リフリヤンヂヤ及びエストランヂヤの諸縣、（六）ヴイーレンスク、ヴイテーブスク、グロドノ、コヴエン、ミンスク及びモギーレフの諸縣、（七）ウオルインスク、ポドーリスク及びキエフの諸縣、（八）ヴヤートカ及びペルミの兩縣。（九）アルハンゲリスク、ヴオログダ及びオロネーツの諸縣。

る。一八六三年及び一八九七年に於ける歐露の九地帶の都市住民に關する資料を掲げる。(四一〇頁參照)

吾人の興味を惹く問題に就いて最も大なる意義を有してゐるのは、次の三地帶に關する資料である。(一) 非農業的工業地帶(最初の一部類一一縣を指す。その中に二首都の縣を含む。)

(註。吾人の採用した非農業諸縣を首都の縣に加へることの正當なことは、首都の住民が主にこれ等の縣から出た者であると云ふことによつても證明される。一八九〇年十二月十五日のペテルブルグに於ける人口調査によると、全人口は農民と町人とで七十二萬六千人であつた。その中五十四萬四千人(即ち四分の三)は、吾人が第一地帶を造つた二つの縣に於ける農民と町人とであつた。)この地帶からは、他の各地帶へ移住する者が極く少なかつた。(二)中央非農業地帶、(十三縣——第三部類)この地帶からの移民は、一部分は先の地帶に對し、その大部分は次の地帶に對し、非常に盛んであつた。(三)邊境農業地(九縣——第四部類)は、改革以後の時代に植民地となつた地帶である。これ等の三三縣全部に於ける都市移民の割合は、表によつて見ても明白である如く、歐露全體に於ける都市住民の割合と比較して幾らも違つてゐない。

第一地帶に於て、即ち非農業的若くは工業的地帶に於て、吾人は都市住民の割合が特に迅速に、一四、一%から二一、一%まで高まつてゐるのを見る。所が、農村住民の生長は、此處では極めて微々たるもので――ロシア全體に於ける一般の生長より殆んど二倍も少ない。これに反し、都市住民の澎張は、平均より遙かに多い。(九七%に對し一〇五%)若しロシアを西歐の各工業國に比較すれば、(我國に於て屢々行はれる如く)たゞこの一地帶とだけこれ等の工業國を比較しなければならぬ。何故かと云へば、たゞこの地帶のみが、これ等資本主義的工業國と殆んど同一の事情にあるからである。

第二の地帶に於て、即ち中央農業地帶に於て、吾人は異つた光景を見る。都市住民の割合は、此處では非常に低く、そしてその膨脹が平均以下に遲々としてゐる。一八六三年から一八九七年迄の都市住民並に農村住民の增加は、ロシアに於ける平均增加率より遙かに少ない。それは、この地帶から移民が各邊境地へ向つて一大潮流のやうに流れたからで、この現象はこの事實によつて說明される。ヴェ・ミハイローフスキイ氏の計算によると、一八八五年から一八九七年までの間に、此處から流れ出た移民數は、約三百人で、即ち人口の十分の一以上に當る譯である。

第三の地帶に於て、即ち邊境地方に於て、吾人は都市住民の增加率が、幾分平均以下（一二・二%から一三・三%までに、即ち100:118と云ふ比例である。所が、平均率は、九・九四%から一二・七六%までに、即ち100:128と云ふ比例でなければならぬ。）であつたのを見る。然るに都市住の膨脹は、此處では薄弱でないばかりでなく、平均より遙かに高い。（+97%に對し+134%（それ故に農業から工業への住民の脫出は、極めて激しいが、この脫出は、移民の結果農業住民の多大の膨脹により蔭蔽されてゐる。即ちこの地帶に於て農村住民は、八七%も膨脹した。然るにロシアに於ける平均膨脹率は、四八・五%である。各個々の縣に就いて見ると、住民が粗工業に吸收されて行く漠然たる過程は、益々明瞭である。例へば、タウリーツ縣では、一八九七年に於ける都市住民の割合は、一八六三年に於けるものと同一（一九・六%）であつたが、ヘルソン縣に於ては、この割合は、更に低下した。（二五・九%から二五・四%まで）尤も、兩縣に於ける都市の膨脹は、首都の膨脹より幾分遲れてはゐたが。（首都所在の兩縣に於ける+141%に對し、+131,+135%）それ故に新らしい土地に新らしく農業住民が形造られたことは、順序として更に非農業住民の大膨脹を惹起する譯である。

(三) 工場地と工場村並に商工業地と商工業村との生長

都市以外に精工業中心としての意義を有つてゐるのは、第一に郊外地帶である。この地帶は必ずしも都市と一緒に算へられる譯ではない。この地帶は、大都市の近郊一帶を益々廣い範圍に包含しつゝある。第二に、精工業中心地としての意義を有つてゐるのは、工場地と工場村とである。斯の如き精工業中心地は、(註。第七章及び第八章參照。第五章に對する第三附錄參照)都市住民の割合の極めて低い工業諸縣に特に多い。先に掲げた都市住民に關する地帶別資料表は、工業九縣に於てこの割合が一八六三年には七・三%で、一八九七年には八・六%であつたことを示してゐる。それは、これ等諸縣の商工業住民が、主に都市にでなく、寧ろ精工業村落に集中されてゐる爲である。ウラヂーミル、コストローマ、ニゼゴーロド及びその他の諸縣の『都市』の中には、三千以內、二千以內または更に一千以內の人口を有するやうな都市が少なくない。然るに『村落』の中には、たゞ製造工場勞働者だけでも二千、三千、五千と算へるもの

が澤山にある。改革以後の時代に於て『都市は益々迅速に膨脹するやうになつた。而もこれ等の都市には、新タイプの移住地の膨脹が、即ち都市と田舍との中間的タイプ――製造工場中心地の膨脹が併合された。』と、『ヤロスラフ縣概觀』（第二部、一九一頁）の編纂者は言つてゐるが、全くその通りである。これ等中心地の大膨脹とこれ等中心地に集中された製造工場勞働者數とに關する資料は、既に前に掲げた通りである。吾人が瞥見した如く、斯の如き中心地は、ロシア全體に於て、獨り工業諸縣に於てばかりでなく、更に南露に於ても少なくない。都市住民の割合の最も低いのは、ウラル地方である。即ちヴャートカ及びペルミ兩縣に於て、一八六三年には三・二％一八九七年には四・七％であつたが、なほ『都市』住民と精工業民との相對的大小の實例を左に掲げる。ペルミ縣クチスノウフィムスキイ市外地帶に於て、都市住民は六千四百人に等しい。（一八九七年）然るに一八八八年――一八九一年の自治會記錄は、市外地帶內工場地に於て八萬四千七百人を算へてゐる。その中五萬六千人は全く農業に從事せず、たゞ五千六百人だけが主に土地から生活資料を獲得してゐるに過ぎない。エカテリンブルグ市外地帶に於ては、自治會の記錄に依ると、六萬五千人は土地を有せず、八萬一千人が僅かに草刈場だけ

を有つてゐる。つまり、たゞ兩市外地帶だけの精工業に從事する都市以外の住民は、縣全體の都市住民より多いこととなる。（一八九七年――十九萬五千六百人！）

最後に、工場村以外に精工業中心地としての意義を有つてゐるのは、商工業村である。これは大なる家内工業地帶の頭となつてゐるものか、或はその位置が河岸にあるとか、鐵道の停車場附近にあるとかの理由によつて、改革以後の時代に迅速に發達するかしたものである。斯の如き商工業村の幾つかの實例は、第六章の第二節に擧げて置いた。のみならず、吾人は其處に斯の如き村が都市の如くに田舍から住民を吸收してゐることや、斯の如き村の住民の方が普通教育程度が高いことなどをも瞥見した。（註。それ自體住民の極めて大きい中心地となつてゐる村の數が、ロシアに於て如何に澤山あるかと云ふことに就いては、（古くはあるが）次の如き『陸軍統計集』の資料により判斷することが出來る。即ち歐露の二五縣に於て、六〇年代には人口二千人以上の村を一、三三四も算へた。その中一〇八は五千――一萬の人口を有し、六は一萬――一萬五千の人口を有し、一は一萬五千――二萬の人口を有し、一は二萬人以上の人口を有してゐた。（一六九頁）資本主義の發達は、獨りロシアに於てばかりでなく、凡ての國に於ても、

公然都市の中に算へられてゐないやうな新精工業中心地を形造るものである。『都市と村落との差異は、拭ひ去られつゝある。即ちこれが膨脹しつゝある精工業都市の附近に於て行はれるのは、工業上の建物と勞働者の住居とが、都市の近郊や郊外に喰み出した結果である。これが衰微しつゝある小都市（編輯者註。第一版には「小都市」ではなく「農業都市」となつてゐる。）の附近に於て行はれるのは、これ等の小都市が近郊の村々と接近するからである。それからなほ大精工業村落發達の結果である。』……『都市移住地と村落移住地との差異は、多數の過渡的形成により拭ひ去られつゝある。統計は既に以前からこれを認め、都市の歴史的法律的解釋などさて置き、その代りに住民數に依つてのみ移民地を區別する統計的解釋をした。』（ビュヒャー『國民經濟の成立』（デイ・エントステーウング・デル・フォルクスウイルトシャフト） Tüb, 1863, 296—297, 303—304頁）ロシアの統計は、この點に於ても甚だしくヨーロッパの統計から遲れてゐる。ドイツに於てもフランスに於ても（『ステーツマン・イヤーブック』、596, 474頁）人口二千人以上を有する村落は、都市に算へられてゐる。イギリスに於ては、bet urban sanitary districts, 即ち工場村及びその他も都市に算へられてゐる。それ故に『都市の』住民に關するロシアの資料は、全然ヨーロッパの資料と比較することが出來

ない。第二版の増補。編輯者。》なほ範例としてヴォロネヂ縣に就いての資料を引證しよう。それは都市移住地と非都市商工業移住地との比較的意義を示す爲である。ヴォロネヂ縣の『統計集』は、一つの綜合表を提供してゐるが、それはヴォロネヂ縣八市外地帶による村落の類別表である。これ等の市外地帶には、都市が八つあり、その人口五六、一四九人（一八九七年）である。村落の中で四つは、戸數九、三七六戸、人口五三、七三二人を有してゐる。即ち都市より遙かに大きい譯である。これ等の村落には、二四〇の商業用建物があり、四〇四の工業用建物がある。總戸數の中で六〇%は、全く土地を耕さない。二一%は雇傭勞働で半分くらゐ耕し、七一%は働く家蓄も財産目錄も有つてゐない。そして一年ぢう穀物を買ひ入れてゐる。八六%は營業に從事してゐる。吾人はこれ等中心地の全住民を商工住民に加へるけれども、この商工住民數を增加しないのみか、寧ろ減少するくらゐである。何故かと云へば、これ等八つの市外地帶にある總數二一、九五六の經營事業は、全然土地を耕さしてゐないからである。それにも拘らず、吾人の採用した農業縣に於ける都市以外の商工業住民は、都市に於けるものより少なくないことが分る。

（四）非農業的出稼營業

然し工場村、工場地、製造所村、製造所地及び商工村、商工地を都市に加へることは、まだ到底ロシアの全精工業住民を網羅し盡すものではない。農民土地共有團に移住の自由がないことと、階級的に蟄居してゐることは、ロシアに於ける有名な特質を説明するものである。その特質とは、工業中心地に於ける作業によつて生活の資を得、これ等の中心地に於て一年の或る部分を送る所の農村住民の少なからざる部分が、ロシアでは精工業住民に加へらるべきものであると云ふ點である。吾人は非農業的出稼營業に就いて述べる。これ等の『工業家等』は、官邊の見解から云ふと、たゞ『補助的賃銀』のみを有する農民なる耕作者である。そして民衆主義的經濟學の代表者等の大多數は、狡猾にも自分の理智を滅して、この見解を抱いてゐた。たつた今述べたこの見解が、成り立たないことに就いては、より詳細に説明する必要はない。何れにしても、また如何なる立場からこの現象に接しても、この現象は住民が農業から脱して商工業的職業に行きつゝあることを表示するもので、これは、何等疑ふ餘地のない所である。

(註。エヌ――オン氏は住民の粗工業化される過程をロシア内に全く認めなかつた。ヴェ・ヴェ氏は出稼の增加が、住民の農業脫出を表示するものであることに氣附きもし、またこれを承認した。(『資本主義の運命』一四九頁) 然し彼は『資本主義の運命』に關するその思想を綜合する爲にこの過程を採用しなかつたばかりでなく、この過程を不平を以て消して了はうとした。その動機は、『斯うすることを極めて自然で、(それは資本主義社會に取つてだらうか?ヴェ・ヴェ氏はこの現象なしに資本主義を考へ得るのであらうか?) そして幾分か望ましからぬものと認める人々がある』と云ふにある。(同上) ヴェ・ヴェ氏は『幾分か』など拔きにして、望ましいものと思つてゐるのだらう!)) 都市の提供する精工業住民數に就いての觀念が、この事實から何れくらゐ變つて來るか――次の實例によつても見ることが出來る。カルガ縣に於て、都市住民の割合は、ロシアの平均率より遙かに低い。(一二・八%に對し八・三%) 然しこの縣の一八九六年度の『統計概觀』は、旅行券に關する資料により、出稼勞働者の出稼月の總數を割り出してゐる。それによると、出稼月の總數は、百四十九萬一千六百ケ月に當る。それを一二に割ると、出稼不在住民は十一萬四千三百人、即ち『全人口の約一一%』となる。(第一集四六頁) ……この住

民を都市住民（一八九七年—九萬七千九百人）に加へると、精工業住民の割合は、極めて著しいものとなる。

勿論、非農業出稼勞働者の或る部分は、都市の住民の現在數の中に登錄され、而も既に述べた非都市精工業中心地の住民中にも入つてゐる。然しそれはたゞ一部分である。何故かと云へば、この住民の性質が放浪的である爲に、各部分々々の中心地の人口調査によりそれを數へることは困難である。それに人口調査は、普通冬期に行はれる。所が、營業勞働者の最大部分は、春になつて家を出かける。非農業出稼縣の主なるもゝ中からの一によりこれに就いての資料を左に掲げる。（註。『一八八〇及び一八八五年にモスクワ縣の農業住民に交附された居住證』『一八九七年度トヴェーリ縣統計年報』ヂバーノフ著『スモレンスク縣に於ける出稼業』スモレンスク市。一八八六年。同氏著『出稼賃銀及びその他』コストローヤ市。一八七八年。『プスコフ縣に於ける農業住民の營業』プスコフ市。一八九八年。モスクワ縣による割合の誤謬は訂正することが出來なかつた。それは絶對的な資料が示されてゐないからである。コストローマ縣に就いては、各市外地帶別の資料だけがある。それも割合になつてゐる。それで吾人は各市外地

帶別の資料を平均したものを採用せねばならなかつた。その結果、吾人はコストローマ縣の資料を特に區別したのである。ヤロスラーヴリ縣に就いて云ふと、出稼工業家の中で一年ぢう不在の者が、六八、七%、秋と冬だけ不在の者が、一二、六%、春と夏だけ不在の者が、一八・七%と算へられてゐる。一言して置くが、ヤロスラーヴリ縣の資料は、『ヤロスラーヴリ縣概觀』第二部、ヤロスラーヴリ市、一八九六年。）先の資料と比較することが出來ない。何故かと云へば、この資料は司祭の申告を基礎としたもので、旅行券に關する資料を基礎としてゐないからである。）

交附された居住證數割當

一年中の時期		冬期
モスクワ縣（一八八五年）	男子	一九、三
	女子	一八、六
トヴエリ縣（一八九七年）／スモレンスク縣（一八九五年）	男及女子	二三、三
		二三、四
プスコフ縣（一八九五年）旅行券	男子	二〇、四
	女子	一九、三
コストローマ縣（一八八〇年）	男子の旅行券	一六、二
	女子の旅行券及身元證明	一六、二
	身元證明	一七、三

	春期	夏期	秋期	合計
	三三、四	三二、七	三八、〇	一〇〇、一
	二〇、六	二一、二	一九、一	九九、九
	二七、八	二七、四	二〇、六	一〇〇
	三四、八	三五、四	四三、八	一〇〇
	一九、三	二〇、四	二〇、四	一〇〇
	二三、五	二六、七	二三、八	一〇〇
	三〇、三	二三、六	二七、八	一〇〇
	二三、二	二九、七	二五、四	一〇〇
	二七、八	二三、二	二四、六	一〇〇
	四三、八	一五、四	一七、九	一〇〇
	四〇、六	二〇、四	二五、四	一〇〇
	三九、四	二五、四	一七、九	一〇〇

交附された旅行券の數は、何處でも春に向つて最大限度に達する。それ故に一時不在の勞働者中大部分は、都市の人口調査記錄中に入つてゐない。(註。例へばペテルブルグ郊外に於ける人口は、夏期になると著しく增加する。)然しながらこれ等の一時的な都會人は、これを農村住民に屬せしめるより、寧ろ都市住民に屬せしめ得る當然の權利がある。即ち『一年ぢう若くは一年の大部分都市に於ける勞働質銀からその生活費を取り出してゐる家族は、都市を以てその永住地と考へ得る極めて大なる根據がある。都市はこれ等の家族の生活を村落以上に保證してゐる

る。これ等の家族は、村落とはたゞ血族關係と財政的關係とを有つてゐるに過ぎない。』（註。一八九六年度『カルガ縣統計概觀』カルガ市。一八九七年。第二部一八頁）この財政的（フィスカル）關係が今日迄如何に大ある意義を有つてゐるかと云ふことは、例へば次の如き事實によつても明白である。即ち出稼をするコストローマ人の中に『土地に對し年貢の或る小部分を取るやうな主人達は少ないが、彼等主人達は普通その土地を貸し附けて、借地人に土地の周圍に菜園を作らせる。そして凡ての年貢は主人自身が支拂ふ。』（デー・ヂバーノフ著『農婦の方面』一八九一年。二一頁）また『ヤロスラフ縣概觀』（第二部、ヤロスラーヴリ市、一八九六年）に於ても吾人は出稼營業勞働者に出に取つて、農村及び分讓地から身請される必要のあることが屢々指摘されてゐるのを見る。（二八、四八、一四九、一五〇、一六六及びその他の頁）（註。出稼營業は……停止することなき都市膨脹過程を蔽ふ所の形態となつてゐる。……土地共有制度とロシアの財政上並に行政上に於ける種々なる特殊性とは、農民が西歐に於けるが如く容易に都會人に轉ずることを許さない。……法律的な糸は、彼（出稼人）と村との關係を支持してゐる。然し本來彼はその職業から云つても、習慣から云つても、または趣味から云つても、全く都市に接合され

たもので、屢々この關係に於て軛を見る。』『（ルースカヤ・ムイスリ』一八九六年。第一一號、二二七―二二八頁）これは極めて正確なことであるが、然し政論家に取つてはこれだけでは不滿足である。何故に著者は斷乎として移動の完全な自由と農民の土地共有團脫退の自由とを主張しなかつたのであらう？我國の自由主義者等は、矢張りまだ我國の民衆主義者等を恐れてゐる。これは詰らぬことである。

比較の爲に左に民衆主義に同情を有するヂバーノフ氏の議論を紹介する。『都市出稼は、我國の兩首都及び大都市の猛烈な膨脹と都市の土地なきプロレタリアートの增加とに對する所謂避雷裝置（原文のまゝ！）である。衞生上の關係から云つても、また社會經濟的關係から云つても、この出稼の影響は、有利なものと思ふ必要がある。國民の大衆が、出稼勞働者に取つて或る保證（彼等出稼勞働者等は、金を出してこの有難からぬ『保證』から脫出してゐる！）となつてゐる所の土地から完全に分離されない限り、これ等の勞働者等は資本主義的生產の盲目な道具となる譯に行かない。從つて農工土地共有團設立の希望が保存されてゐる。（『法律通報』一八九〇年。第九號。一四五頁）小ブルジョアの希望を保存して置くこと、これは實際に利益で

ないだらうか？所が、『肯目なる道具』に就いて云へば、ヨーロッパの實驗もロシアに於て見られる凡ての事實も、この性質決定が、土地や家長的關係との連絡を斷ち切つた者よりも寧ろこの連絡を保存してゐる作業者に遙かにより多く適用されるものであることを示してゐる。ヂバーノフ氏自身の數字と資料とは、出稼をする『ペテルブルグ人』の方が、或る『森林の』市外地帶に住んでゐる土着のコストローマ人より、教育の點に於ても文化の點に於ても開化の點に於てもより多く進んでゐることを示してゐる。）

非農業的出稼勞働者數は、何のくらゐ多いであらうか？凡ての出稼業に從事してゐる勞働者數は、五百萬人――六百萬人以下ではない。實際に、一八八四年歐露に於て交附された旅行券と身元證明書とは、四百六十七萬に達し、旅行券の收人は、一八八四年から一八九四年までの間に、三分の一以上（三百三十萬留から四百五十萬留に）增加した。一八九七年にロシアに於て交附された旅行券と身元證明書との總數は、九百四十九萬五千七百枚であつた。（その中歐露の五〇縣に於て九百三十三萬三千二百枚）一八九八年には、八百二十五萬九千九百枚（歐露七

百八十萬九千六百枚）であつた。ヱス・コロレンコ氏は歐露に於ける過剰勞働者數（土地の需用に比較して）を六百三十萬人と算定した。吾人が既に瞥見した如く、（第三章。第九節）一一の農業諸縣によると、交附された旅行券の數は、ヱス・コロレンコ氏の計算を超過（百七十萬に對する二百萬）してゐることが分つた。で、こん度は吾人は六つの非農業諸縣に關する資料を附け加へることが出來る。即ちコロレンコ氏はこれ等の縣内に過剰勞働者百二十八萬七千八百人を算し、交附された旅行券數を丁度百二十九萬八千六百枚と算へた。斯くして歐露の一七縣に於て、（黑土縣二十非黑土縣の）ヱス・コロレンコ氏は三百萬人の過剰（土地の需用に對し）勞働者を算へた。所が、九〇年代になると、これ等の一七縣に於て、三百三十萬枚の旅行券と身元證明書とが交附された。一八九一年には、これ等の一七縣は、旅行券收入總額の五二・二%を出した。それ故に出稼勞働者數は、多分六百萬人以上に達してゐるらしい。最後に、自治會の統計資料は、（大部分古くなつた所の）ウワーロフ氏をしてヱス・コロレンコ氏の數字は、眞實に近いが、出稼勞働者五百萬と云ふ數字は、『高い程度に於て疑はしい。』と云ふ結論をなさしめた。

で、こん度は、非農業的出稼勞働者と農業的出稼勞働者との數が、如何に多いかと云ふ疑問

が起る。ヱヌ――オン氏は『農民の出稼營業の最大多數は、農業的である。』(『概觀』一六頁)と斷定してゐるが、この斷定は極めて大膽で、而も全然間違つてゐる。ヱヌ――オン氏が引合に出してゐるチャスラフスキイは、非農業的出稼勞働者と農業的出稼勞働者とを出してゐる地域の大きさに就いて何等の資料をも引かず、一般的な判斷に滿足してゐるが、これは遙かに用心深い態度である。鐵道による旅客の移動に關するヱヌ――オン氏の資料も、矢張り何事をも證明するものではない。何故かと云へば、非農業勞働者もまた主に春になつて家を出る。のみならず、農業勞働者より比較にならぬ程大なる程度に於て鐵道を利用する。その反對に吾人は想ふ。出稼勞働者の多數(假令『最大多數』でないにしても)をなしてゐるものは、非農業的勞働者であると。この意見の基礎は、第一に、旅行券收入の割當に關する資料と、第二に、ヴェーシン氏の資料である。なほフレーロフスキイは『種々なる名稱の稅金』(その稅金の三分の一以上は、旅行券收入であつた。)による收入の割當に關する一八六二年――一八六三年度の資料を基礎として、出稼せんとする農民の最大の運動は、首都の兩縣並に非農業諸縣から起つて來るものであると云ふ斷案を下した。(『住。』『ロシアに於ける勞働階級の境遇』サンクト・ペテルブルグ、一八

六九年、四〇〇頁以下。)吾人は先に(本節の第二點)一一の非農業諸縣を一地域に結合し、非農業勞働者の大多數は、これ等諸縣から出稼することを述べたが、若し吾人がこれ等の一一縣を取るならば、これ等の諸縣に一八八五年には全歐露の住民の僅かに一八・七%(一八九七年には、一八・三%)だけがあつたのに、これ等の諸縣は旅行券收人を一八八五年には四二・九%(一八九一年には、四〇・七%)を與へたと云ふ事實を見る。((註。一八八四、五年並に一八九六年度の『ロシアの調査報告集』中の旅行券收入に關する資料。一八八五年には、歐露の旅行券收入は、人口一、〇〇〇人に對し三七留であつたが、一一の非農業諸縣では、人口一、〇〇〇人に對し八六留であつた。)非農業勞働者を出す縣は、外にもまだ非常に澤山ある。それ故に吾人は非農業勞働者が出嫁勞働者の半數以下であると思はねばならぬ。ヴェーシン氏は歐露の三八縣(不在に關する各種類總數の九〇%を出す)を出稼の種々なる種類の優越に從ひ部類別にし、次の如き資料を擧げてゐる。

縣の部類別	一八八四年の不在種類數(單位千) 旅行券の合計	身元證明の合計	一八八五年に於ける人口(單位千)	人口一、〇〇〇人に對する種類
一、非農業出稼の盛んな一二縣	九六七、八	七九四、五	一八、六四三、八	九四
二、過渡期の五縣	四二三、九	二九九、五	八、〇〇七、二	九〇
三、農業出稼の盛んな二一縣	七〇〇、四	一、〇四六、一	四二、五一八、五	四一
三八縣の總計	二、〇九二、一	二、一四〇、一	六九、一六九、五	六一

(註。最後の二つの欄は、吾人が補足したものである。第一部類に入つてゐるのは、アルハンゲリスク、ウラヂーミル、ヴォログダ、ヴャートカ、カルガ、コストローマ、モスクワ、ノヴゴーロド、ペルミ、ペテルブルグ、トゥヴェーリ及びヤロスラーヴリの諸縣、第二の部類に入つてゐるのは、カザン、ニゼゴーロド、リャザン、トゥーラ及びスモレンスクの諸縣、第三の部類に入つてゐるのは、ベッサラビヤ、ヴォルインスク、ヴォロネーヂ、エカテリノスラフ、ドン、キエフ、

クールスク、オレンブルグ、オリョール、ペンザ、ポルタワ、ポドーリスク、サマーラ、サラトフ、シムビルスク、タウリーツ、タムボフ、ウファ、ハリコフ、ヘルソン及びチェルニーゴフの諸縣。此處で注意を要する點は、この部類に於て農業出稼の意義を誇張する所の不正確があることである。スモレンスク、ニゼゴーロド及びトゥーラの諸縣は、第一部類に入るべきである。

『一八九六年度ニゼゴーロド縣農業概觀』第一一章に比較。『一八九五年度トゥーラ縣記念書』第六部一〇頁には、出稼營業に行く者の數が、十八萬八千人と算へられてゐるが、エス・コロレンコ氏は過剩勞働者を僅かに五萬人と算へた！然るに六つの北部非黑土市外地帶は、十萬七千人の出稼人を出してゐる。（クールスク縣は第二部類へ入らねばならぬ。（エス・コロレンコ第一集。七つの市外地帶から出稼する者の大部分は、手工業的營業に從事し、他の八市外地帶から出稼する者は、農業的營業に從事する。）遺憾ながら、ヴェーシン氏は不在種類數に關する縣別的資料を提供してゐない。）

『これ等の數字は、出稼營業が第三部類より寧ろ第一部類に於て最も發達してゐることを示すものである。……次に前記の數字によつて判明するのは、部類が異なるに應じて出稼不在期

間の繼續そのものも異つて來ることで、非農業的出稼業の盛んな處に、不在の繼續性も遙かに著しいことが分る譯である、』(『デーロ』一八八六年、第七號、一三四頁)

最後に、前記の製造業統計は、交附された居住證明書の數を歐露の五〇縣全體に亘つて割當てる可能を吾人に與へる。前記の訂正をヴェーシン氏の部類中に加へ、一八八四年度に不足した一二縣をこの三部類に割當てると、(第一の部類に――オロンツォーフとプスコフとの兩縣を、第二の部類に――バルチック沿岸諸縣並に西方諸縣、即ち九縣を、第三の部類には――アストラハン縣を)次の如き表を得る。

縣の部類	交附された居住證總數	
	一八九七年	一八八九年
一、非農業出稼の盛んな十七縣	四、四三七、三九二	三、三六九、五九七
二、過渡期の十二縣	一、八八六、七三三	一、六七四、二三一
三、農業出稼の		

盛んな二十一縣……三、〇〇九、〇七〇　二、七六五、七六二
五十縣の合計　九、三三三、一九五　七、八〇九、五九〇

この資料によると、出稼業は第三部類より第一部類に於て著しく盛んである。

それ故にロシアの非農業地帶に於ける住民の移動が、農業地帶に於ける住民の移動より遙かに激しいことは、疑ふ餘地がない。非農業出稼勞働者數は、農業出稼勞働者より多く、三百萬人以上に達してゐる筈である。

凡ての資料の根源は、出稼が非常に發達してゐることと、益々盛んになりつゝあることを證明してゐる。一八六八年には二百十萬留であつた（一八六六年には百七十五萬留であつた）旅行券收入は、一八九三年―一八九四年には四百五十萬留にまで增加した。即ち二倍以上に膨脹したのである。交附された旅行券と身元證明書との數は、モスクワ縣に於ては、一八七七年から一八八五年までに二〇％（男子の方）及び五三％（女子の方）だけ增加した。トヴェーリ縣に於ては、一八九三年から一八九六年までに五・六％だけ、カルガ縣では一八八五年から一八九五

年までに二三%だけ、(不在月數は、二六%だけ)スモレンスク縣では一八七五年の十萬から一八八五年の十一萬七千並に一八九五年の十四萬まで、プスコフ縣では一八六五年—一八七五年の一一、七一六から一八七六年の一四、九四四並に一八九六年の四三、七六五(男子の方)までに增加した。コストローマ縣では、一八六八年に男子百人に對し二三・八%の旅行券と身元證明書とが交附され、女子百人に對し〇・八五%の旅行券と身元證明書とが交附されたが、一八八〇年には、三三・一%及び二・二%の旅行券と身元證明書が交附された。

住民が農業を脫出して都市へ遁れ出るやうに、非農業出稼もそれ自身進歩的現象をなしてる。非農業出稼は、見捨られ、置き去りにされ、歷史によつて忘れられた邊鄙な土地から住民を引き拔いて、これを現代の社會生活の渦中に引き摺り込む。非農業出稼は、住民の教育程度とその自覺程度を高め、住民に文化的習慣と必要とを植えつける。(註。『出稼市外地帶は、その生活の向上してゐる點に於て、農業地帶や林業地帶に遙かに勝つてゐる……ペテルブルグ人の衣服は、遙かに清潔で、優美で、衛生的である。……子供達は身奇麗にしてゐる。だから彼等には、疥癬やその他の皮膚病が少ない。』(ヂパンコフ氏著『出稼業の影響』三九頁。)『スモレン

スク縣に於ける出稼營業』八頁參照)『出稼村と土着村とは、截然と異つてゐる。前者の家屋や衣服や凡ての習慣や娯樂は、農民生活より寧ろ町人生活を想はせるものである。』(『スモレンスク縣に於ける出稼營業』三頁) コストローマ縣の出稼郡に於ては、『大半の家屋の中に諸君は紙、インキ、鉛筆及びペンなどを見るであらう。』(『農婦の方面』六七——六八頁)『農民を出稼に引きつけるものは、『高尚な秩序のモチーヴ』である。即ちペテルブルグ人の大なる外部的の發達と垢抜けとである。農民等は、『良い場所を探してゐる』のである。『ペテルブルグの勞働と生活とは、田舎の勞働や生活より容易であると思はれてゐる。』(註。同上、二六——二七及び一五頁)『田舎の住民は悉く灰色の人間と呼ばれてゐる。而も彼等はかう呼ばれるのに對して少しも憤慨せず、寧ろ自分でもかう自稱し、ペテルブルグへ學問に出して呉れなかつたのが悪いのだと云つて、兩親を怨んでゐる。而も田舎に於けるこれ等灰色の住民は、純農業地に於ける者のやうに灰色ではないと辯護して置く必要がある。彼等は知らず識らずペテルブルグ人から外形と習慣とを受ける。都會の光は、間接に彼等にも注がれるのである。』(註。同上、二七頁) ヤロスラフ縣に於ては、(金持になる實例以外に)『更に他の原因が、彼の家から凡ての者を追ひ出す。

これは――輿論である。輿論はペテルブルグ若くは何處かに生活したことがなく、たゞ農業か或は何等かの手工業に從事してゐる人に一生涯牧者と云ふ名稱を與へる。而もかうした人は、自分の爲に花嫁を見出すことが困難である。』(『ヤロスラフ縣概觀』二の一一八頁)都市への出稼は、農民の公民としての人格を高上せしめ、深淵のやうな家長的並に個人的從屬關係と階級關係とから彼を解放する。この二つの關係ほ、田舍に於ては、極めて强いものである。(註。殊にコストローマ縣の農民に町人に籍を變へさせたものは、『體刑の可能である。所が、體刑は灰色の住民より、華美になつたペテルブルグ人に取つてより多く怖ろしいものである。』(『農婦の方面』五八頁))……『出稼の存在を支持する第一の事實となつてゐるは、民衆の間に人格的自覺が生長して來たことである。農奴制度からの解放と、農村住民の最も精力ある部分が、既に以前から都會生活に參加してゐたこととは、ヤロスラフの農民の中にその『自我』を擁護し、田舍生活の事情によつて押し込まれたその不幸な從屬的境遇から脫却して、富裕な、自由な、そして尊敬される境遇に入らうとする希望を喚起した……農民は異鄕で勞銀生活をなしつゝも、なほ且つより多くの自由を感じ、他の多くの關係に於ても他の階級人と同等の權利を感ずる。

それで農村の青年は、益々盛んに都市へ走るのである。』(『ヤロスラーフ縣概觀』三一の一八九―一九〇頁)

都市への出稼は、舊式な家長的家族制度を弱め、女子をもつと獨立的な、男子と同等な境遇に置く。『土着民の多い土地と比較すると、ソリガリーチやチュユフロマ(譯者註。共にコストローマ縣の中でも最も出稼の盛んな市外地帶)『年長者の家長權の意味に於てのみならず、剰へ親と子、夫と妻との間の關係に於てさへ餘り堅實でない。十二歳からピーテル(譯者註。農民はペテルブルグをかう呼んだ。)へ遣られる息子達からは、勿論兩親に對する强烈な愛や親の住家に對する執着などを豫期する譯に行かない。彼等は知らず識らず世界主義者(コスモポリート)となる。『住み良い處を祖國とする』(註。同上。八八頁)のである。『男子の權力と援助なしに生活し慣れたソリガリーチの女は、農業地帶の意氣地のない農婦とは、まるつきり似てもつかない。ソリガリーチの女は、自由であり、獨立的である。妻を毆打したり、罵詈したりすることは、此處では珍らしい例外である……要するに男女同權は、殆んど萬事に現はれてゐる。』(註。『法律通報』一八九〇年、第九號、一四二頁)

最後に――Last but not least（譯者。最後でも不重要ではない。）――非農業的出稼は、出稼に出て行く雇傭勞働者の勞働賃銀ばかりでなく、殘つてゐる雇傭勞働者の勞働賃銀をも高める。

この事實を最も浮刻的に表示してゐるものは、次の如き一般的現象である。即ち非農業諸縣は、農業諸縣よりも高い勞働賃銀を支給するので、農業諸縣から農村勞働者を惹き引けると云ふ一般的現象である。（註。第四章の四節に比較）左にカルガ縣に就いての興味ある資料を掲げる。

	出稼數による市外地帶の類別	男子の全人口に對する男子出稼勞働者の割合	一ヶ月の稼ぎ高（留）出稼工業家の	農村に於ける年雇勞働者の
一	三八、七	五、九	九	八、八
二	三六、三	五、三	八、八	五、三
三	三二、七	四、九	八、四	四、九

『これ等の數字は、次の如き現象を全完に說明するものである。即ち、（一）出稼營業は農業的製造業に於ける勞働賃銀の釣り上げに影響する。（二）出稼營業は、住民の優良精力を抽き取る

と云ふやうな現象を完全に説明するものである。』（註。『一八九六年度カルガ縣統計概觀』第二部、四八頁）釣り上げられるのは、獨り金錢による勞働賃銀ばかりでなく、現物による勞働賃銀もさうである。一〇〇人の作業者中から六〇人以上の出稼人を出す部類の市外地帶に於て、年雇小作人に支拂ふ平均勞銀は、六九留若くは裸麥一二三プードであり、四〇——六〇%の出稼勞働者を有する市外地帶に於ては、六四留若くは裸麥一二五プードであり、四〇%以下の出稼人を出す市外地帶では、五九留若くは裸麥一一六プードである。（註。同上、第一部、二七頁）これ等の部類の市外地帶に就いて云ふと、勞働者の不足を訴へる通信の割合は、五八%——四二%——三五%と云ふ具合に規則正しく低下しつゝある。加工々業に於ける勞働賃銀は、農業に於ける勞働賃銀より高い。『極めて多くの通信者諸君の反響によると、營業は農民の間に新らしい必要（茶、更紗、靴、時計及びその他）の發達することを援け、必要の一般的水準を高め、斯くして勞働賃銀の釣上に影響するものである。』（註。同上、四一頁）左に或る通信者の典型的反響を掲げる。『不足は（勞働者の）常に十分に感じられてゐる。その原因は、郊外の住民が甘やかされて、鐵道の工場で働き、其處で勤務してゐる點にある。カルガ市に近いことと　カル

が市に市場があることとは、鷄卵や牛乳やその他の物を賣却する爲に地方の住民を集める。また居酒屋で大勢で飲酒が出來ることも、地方の住民を集めるものである。なほ凡ての住民が、多くの俸給を貰つて何もしないことを望んでゐるのも、その原因である。農村勞働者等は、農村に生活することを恥と心得て、都市へ出で、都市に於てプロレタリアートと黄金の口とを組織する。田舍は仕事の出來る健康な作業者がゐないのに困る。』(註。同上、四〇頁。著者のイタリック活字。)吾人は出稼營業に對する斯の如き批判を民衆派的批判と合づけ得る完全な權利を有つてゐる。例へば、ヂバンコフ氏の如き、出稼に行く者が餘り者の作業者ではなく、『必要のある』作業者で、これに代つて外來の農業家が入つて來ると云ふことを指摘すると同時に、『斯の如き相互的交換が極めて不利益なものである』ことは、『明瞭である』と言つてゐる。(註。『農婦の方面』三九頁及び八頁。『これ等の眞の農業家等は、(外來の)その裕福な生活狀態を以て、その生活の基礎を土地に於てゞなく、出稼に於て見出してゐる基本住民に覺醒的影響を與へはしまいか?』(四〇頁)『然るに吾人は先に反對の影響の實例を引證した。』と云つて著者は悲觀してゐる。その實例とは、左の如きものである。ヴォログダ人等は、土地を買つて、『極めて裕福な』

生活をしてゐた。『余はヴォログダ人の一人に、「何の不足もないのに、何故にその息子をペテルブルグへ出稼ぎさせたか」と訊ねると、次の如き答を得た。即ち「そりやその通りで、俺等は貧乏ぢやない。だが、俺等の生活は、餘り灰色だ。それに息子は、他人を見て、自分も學問をしたくなつたんでさァ。あれは、うちでも學問が好きだもんだからね。』（二二五頁）衰れな民衆派である！土地を買ふ裕福な百姓――土地耕作者の實例さへも、青年を『覺醒せしめることが』出來ないと云ふことを何うして悲しまずにゐられよう。青年は『學問をすることを希望して、『彼を保證する分讓地から逃げ出しつゝあるではないか！』》おゝ、ヂバーノフ氏よ、それは誰に取つて不利益なのか？『都會生活は、幾多の低級な文化的習慣や奢侈と贅澤とに對する嗜好を植え付ける。これは無駄に多額の金錢を奪ひ去る。（原文のまゝ）』（註。『ウラヂーミルの出稼賃銀』三三頁、著者のイタリック活字。）この贅澤その他に對する出費は、『多く非生産的である。』（註。『法律通報』九〇の第九號、一三八頁。）ゲルツェンシテイン氏は、『表面的文明』『不品行の流行』、『間斷なき飲食』、『粗野な飲酒と安價な遊蕩』及びその他に就いて卒直に慨歎してゐる。（註。『ロシアの思想』（『ロシア新報』でなく』ロシアの思想』である。）一八八七年、第九號、一

六三頁。)モスクワの統計家等は、多數の出稼の事實から直ちに『出稼の必要を減小するやうな方法』が必要であると云ふ結論を下してゐる。(註。『居住證明書』七頁)カールイシェフ氏は、出稼營業に就いてかう論じてゐる。『たゞ農民の土地利用を家族の最も重要な(!)必要を十分に滿し得る程度まで擴大することのみが、我國々民經濟のこの最も眞劍な題目を解決し得るものである。』と。(註。『ロシアの富』一八九六年、第七號、一八頁。それ故に『最も重要な』必要を滿すべきものは、分讓地であり、その他の必要を滿すものは、明かに『土地に於ける勞銀である。』この土地に於ける勞銀は、『仕事の出來る健康な作業者がない爲に困つてゐる』所の『田舍』から得られるものである。)

而もこれ等の立派な心を有つた紳士諸君の中から誰一人とつて、『最も眞劍な題目を解決』することに就いて評議する前に、先づ農民の移動の完全な自由と、土地を放棄する自由と、土地共有團から脫退する自由と、(『賠償金』なしに)都市であらうが、農村であらうが、兎に角任意な國家の土地共有團へ移住することの自由に就いて考慮する必要があると云ふことを念頭に思ひ浮べた者がないのである!

それ故に住民の農業脱出は、ロシアでは都市の膨脹（一部分國内的植民により眩まされつゝある。）に於て、郊外、製造工場村と商工業村、製造工場地帶と商工業地帶等の膨脹に於て、それからまた非農業的出稼に於て現はれてゐる。改革以後の時代に、廣く、深く、そして迅速に發達した所の、それから發達しつゝある所のこれ等の過程の悉くは、資本主義的發達の必然的構成分子となり。舊い生活形式に對する關係から言つても、深い進歩的意義を有つてゐる。

三　雇傭勞働使用の生長

資本主義の發達に關する問題に於て、殆んど最大に近い意義を有つてゐるのは、雇傭勞働の普及程度である。資本主義、これは商品生産發達の一階程で、この階程に於て、勞働力は商品となるのである。資本主義の根本的傾向は、國民經濟の全勞働力が、企業家等によつて賣買された後に初めて生産に適用されるやうにすることに成り立つてゐる。而してこの傾向が改革以後のロシアに於て如何に現はれたかと云ふことは、吾人が先に詳細に討檢しようと努力した所

である。それ故にこん度はこの問題に就いての總決算をしなければならない。先づ吾人は前記各章に於て一纒めに引用した勞働力販賣者數に關する資料を計算し、次に(次の節に於て)勞働力購入者の人員を描き出すことゝしよう。

勞働力販賣者を造る者は、原料用有價物の生産に參加する國内の勞働住民である。この勞働住民は、男子丁年勞働者約千五百五十萬人から成つてゐると算へてゐる、((註。『材料統計集』(一八九四年内閣發行)の數字は、一五、五四六、六一八人である。この數字は斯くして得られたものである。都市住民は、原料用有價物生産に參加しない住民に等しいと云ふことになつてゐる。丁年の男子農民は、七%だけ減少されてゐる。(4½%は——軍務を終つた者、2½は、村邑組合に勤務してゐる者である。))第二章に於て擧示した如く、農民社會の下級部類は、それ自體農村プロレタリアートを成し立てゝゐるに過ぎない。のみならず、既に述べた如く、勞働力販賣の形式は、このプロレタリアートにより解說される筈である。それで今前記の叙述に於て算へられた雇傭勞働者の各等級を總計することゝしよう。(一)農業雇傭勞働者、その數約三百五十萬人(歐露による)。(二)製造所工場勞働者、鑛業勞働者及び鐵道勞働者——約百五十

萬人。更に（三）建築勞働者――約百萬人、（四）林業、（材木伐採、最初の材木手入れ、流送及びその他）に從事する勞働者、土工、鐵道敷設に從事する勞働者、貨物の積込み積卸し作業に從事する勞働者及び一般に精工業中心地に於ける凡ゆる種類の『黑色勞働』に從事する勞働者。彼等は約二百萬人である。（註。先に吾人が瞥見した如く、たゝ林業勞働者だけでも、二百萬人と算へられてゐる。吾人の擧示した後の二つの作業形態に從事してゐる勞働者數は、非農農的出稼勞働者の總數より多くなければならぬ。何故かと云へば、建築勞働者、黑色勞働者及び特に林業勞働者の一部分は、出稼勞働者にではなく、土地の勞働者に屬してゐるからである。所が、吾人の瞥見した如く、非農業的出稼勞働者の數は、三百萬人以内ではない。）（五）資本家の爲に家庭で働いてゐる勞働者、それから更に『工場制工業』に算へられない加工々業に於て雇傭により働らいてゐる勞働者。彼等は、約二百萬人である。

合計すると、雇傭勞働者は、約一千萬人である。この中から四分の一を除去せねばならぬ。それは女子と子供である。（註。工場制工業に於て、吾人の瞥見した如く、女子と子供とは、勞働者總數の四分の一より少し多い。鑛山工業、建築工業、林業及びその他に於ては、女子や子

供は極めて少ない。反對に彼等は資本主義的家内作業には多分男子よりより多く參加してゐるやうである。)――さうすると、七百五十萬人の丁年男子の雇傭勞働者が殘る。即ち原料用有價物生産に參加する國内丁年男子住民全體の半數が殘る。(註。吾人は決してこの數字の正確な統計的證明を要求する譯ではなく、たゞ實例を以て雇傭勞働の形式の多樣と雇傭勞働代表者の多數とを示さうとするに過ぎない。吾人は誤解を避ける爲にかう言つて置く。)この大多數の雇傭勞働者の一部分は、全然土地と分離して、たゞ勞働力の販賣だけで生活してゐる。これに屬する者は、製造所工場勞働者(疑ひもなく、鑛業勞働者と鐵道勞働者)の大多數と、それから建築勞働者、造船勞働者及び黑色勞働者の或る部分と、最後に資本主義的粗工業勞働者の少なからざる部分と、資本家の爲に家庭勞働に從事する非農業中心地の住民とである。他の大部分は、まだ土地と分離して了はなかつた。その一部分は微細な土地の一片の上に立つてゐる農業生産物によつてその出費を補塡し、從つて吾人が第二章に於て詳細に描き出さうと努力した分讓地を有する雇傭勞働者タイプを形造りつゝある。これまでの記述に於て既に指摘した如く、この雇傭勞働者の全大衆は、主に改革以後の時代に形造られたもので、急速に膨脹し續けてゐる。

資本主義によつて造られる相對的超過住民（若くは失職者豫備軍の一團）に關する問題に於ける吾人の結論の意義を述べる必要がある。國民經濟の全分派に於ける全雇傭勞働者の總數に就いての資料は、この問題による民衆主義的經濟學の根本的誤謬を特に明瞭に曝露してゐる。吾人が既に他の場所（『人口調査書』三八——四二頁。）に於て指摘する機會を有つた通り、この誤謬は經濟派——民衆派（ヴェ・ヴェ氏、エヌ——オン氏及びその他）が、頻りに資本主義を以て勞働者を『解放』すべしと唱へるけれども、ロシアに於ける資本主義的超過住民の具體的形態を研究しようと考へなかつた點にある。次に、この誤謬は、彼等が我國の資本主義の存在そのものゝの爲にも、またその發達の爲にも大多數の豫備勞働者の必要を全然諒解しなかつた點にある。彼等は哀れな言葉と『製造所工場』勞働者數に就いての珍奇な計算とを以て、（註。エヌ——オン氏の『一握』の勞働者に關する議論と、ヴェ・ヴェ氏の實際に古典的な左の如き計算とを想ひ出す。（『理論的經濟學概論』一三一頁）歐露五〇縣に於て、農民階級の丁年男子勞働者は、千五百五十四萬七千人で、その中『資本により結合されてゐるもの』千二萬である。（工場制工業に於ける八十六萬三千人＋鐵道勞働者の十六萬人）爾餘のものは——『農業住民』である。『加

工々業が完全に資本化された』時でも『資本主義的な工場制工業は、』二倍以上の手を取る。(七、六%の代りに一三・三%。住民の爾餘の八六・七%は、『土地を離れず、半年の間無爲に送ることになる』)かう解釋して行くと、何うも經濟的科學及び經濟的統計のこの驚くべき模範により喚起される印象をたゞ弱めるだけになりはせぬかと思はれる。)資本主義的發達の根本的條件の一を化して、資本主義の不可能と誤謬と無地磐及びその他の證明とした。實際、若し小生産者の買收が、農業に於て、林業及び建築業に於て、商業に於て、加工々業に於て、鑛山工業に於て、運送業及びその他に於て、企業家等の最大限度の要求を第一回の注文に應じて滿さうとする數百萬の雇傭勢働者を造らなければ、ロシァの資本主義は、決して現代の高さまで發達し得なかつたであらうし、また一年間も存在し得なかつたに相違ない。吾人は、最大限度の要求と云ふ――何故かと云へば、資本主義者は、たゞ飛躍によつてのみ發達し得るからである。所が、從つて勞働力の販賣を必要とする生産者の數は、常に勞働者に對する資本主義の平均要求以上でなければならぬからである。假令吾人が今雇傭勞働者の各種等級の總數を計算するとしても、吾人はこれによつて資本主義が不斷に全雇傭勞働者を占有し得るものであると言はうとす

るのでは決してない。吾人は雇傭勞働者の如何なる等級を取つて見ても、資本主義社會に於て、斯の如き職業の不變はないし、またあり得ない。數百萬の放浪勞働者と土着勞働者との中からの或部分は、常に失職者豫備軍の中に殘されてゐる。そしてこの豫備軍は、危機の年には、或は或る方面に於ける種々なる工業衰微の場合か、或は勞働者を壓迫する所の機械製造業が、特に迅速に擴大された場合かには、偉大な程度まで高まつたり、或は最小限度まで下つて、勞働者の『不足』さへ呼び起したりすることがある。この勞働者の不足は、別々の工業部門の企業家等により、別々の年に、國内の別々の方面に於て屢々訴へられる。然し中間の年に於ける失職者の數を、せめて略々近い程度までゞも決定すると云ふことは、幾分でも信頼の出來るやうな統計的資料が全然ない爲に不可能である。が、然しこの數は、極めて大きくなければならね筈である。これを證明してゐるのは、先に一度ならず指摘した資本主義的工業と商業と農業との大なる動搖である。自治會統計が立證する所の下級部類の農民の豫算に於ける普通の缺損である。工業プロレタリアートと農村プロレタアートとの列の中に突き出される農民數の增加と雇傭勞働需用の增大――これは一メタルの兩面である。雇傭勞働の形式に就いて云へば、これ等

の形式は、まだ四方から資本主義前の制度の殘骸と組織とを以て包まれてゐる資本主義社會に於て、極めて多種多樣である。この多樣性を無視することは、大なる誤謬に相違ない。ヴェ・ヴェ氏の如く、『資本主義は百萬乃至百五十萬人の勞働者から成る一隅を區切つて、其處から出て來ない』(註。『ノーヴォエ・スローヴォ』一八九六年、第六號、二一頁)と論ずる者は、この誤謬に陷つてゐるのである。資本主義の代りに、此處には既に一大機械精工業が現はれてゐる。然しながらこの百五十萬人の勞働者が、雇傭勞働の爾餘の方面とは、一見何物を以ても結び付けられてゐないかのやうな特別な『一隅』に制限されてゐるとすれば、それは何と云ふ勝手なことで、また何と云ふ人工的なことだらう！實際、この關係は、極めて緊密である。この關係の特質を決定する爲には、現代に於ける經濟組織の二つの根本的要點を引證するだけで十分である。第一に、この組織の根底には、金錢上の經濟が横はつてゐる。『金錢の權力』は工業に於ても農業に於ても、都會に於ても田舍に於てもその全力を發揮してゐる。然したゞ大機械精工業に於てのみ、金錢の權力は完全なる發達に達し、家長的經濟の殘骸を全く一掃し、小數の巨大なる機關(銀行)に集中され、大なる社會的生産と直接に結びつけられてゐる。第二に、現代

の經濟組織の根底に横はつてゐるのは、勞働力の賣買である。農業若くは工業に於ける最小生産者等を取つて見るがいゝ。自身でも雇はれず、また他人をも雇はないと云ふやうな者が、例外であることを諸君は認めるであらう。然しながらこれ等の關係は、たゞ大機械精工業に於てのみ例の完全なる發達と從來の經濟形式からの完全なる離脱とに達するのである。それ故に或る民衆主義者には、極めて微々たるものに思はれるこの『一隅』は、實際には現代に於ける社會關係の精髄をその内に具體化してゐる。而してこの『一隅』の住民、即ちプロレタリアートは、言葉の字義通りの意味から云ふと、勤勞者及び被搾取者の全大衆の唯一の最前線であり、前衛隊である。それ故にたゞこの『一隅』に於て組織された關係の一點から現代に於ける全經濟組織を觀察する場合にのみ、參加者の種々なる部類間の根本的相互關係を解剖する可能を得るのである。從つてこの組織發達の根本的傾向を省察する可能を得るのである。その反對に、この『一隅』から廻避し、家長的小生産の一點から經濟的現象を觀察する者を、歴史の歩みは、或は無邪氣な空想家と變じ、或は小ブルジョア及びアフラリイ（譯者註。大農業家の利益を擁護したドイツの一政黨）の理想論者と化す。

四　勞働力の爲の國内市場の形成

この問題に就いてこれ迄述べて來た所の資料を要約反復する爲に、吾人は歐露に於ける勞働者の移動光景を示すだけに留めよう。斯の如き光景を吾人に提供するものは、經營主等の申告を基礎とする農業局の出版物である。この勞働者移動の光景は、勞働力の爲の國内市場が、一體如何にして組み立てられるものであるかと云ふことに就いての一般的觀念を與へるものである。吾人は、前記出版物の材料を利用しつゝ、農業勞働者と非農業勞働者との移動を區別するだけに努力した。尤も、前記出版物に附された勞働者の移動を說明する圖解には、この區別は引證してゐないけれども。

農業勞働者の最も主要なる移動は、左の如くである。(一)中央の農業諸縣から南部及び東部の邊境地帶へ。(二)北方の黑土諸縣から南方の黑土諸縣へ。南方黑土諸縣からこん度は勞働者は邊境地帶へ出稼に行く。(第三章の第九節及び第十節に比較)(三)中央の農業諸縣から工業諸縣へ。(第四章の第四節に比較)(四)中央及び西南諸縣から甘菜栽培地帶へ。(此處へは一部ガリ

シャからさへ來る。）

非農業勞働者の最も主要な移動は、（一）主に非農業諸縣から（然し相當に農業諸縣からも）兩首都及び大都市へ。（二）それ等の地方から工業地帶へ、ウラヂーミル、ヤロスラフ及びその他の諸縣の工場へ。（三）新らしい工業中心地若くは新らしい工業方面、即ち非工業中心地及びその他へ移動。これに屬する移動は、（イ）西南諸縣の甘菜製糖所へ、（ロ）南部鑛業地帶へ、（ハ）港灣の勞働へ（オデッサ市、ドン河畔のにストフ市、リガ市及びその他へ）（二）ウラヂーミル及びその他の諸縣に於ける泥炭採掘に、（ホ）ウラルの鑛山工業地帶へ、（ヘ）漁業へ（アストラハン市や黑海やアゾフ海及びその他へ）（ト）船内勞働、船舶運送勞働、材木伐採、材木流送及びその他の勞働へ、（チ）鐵道勞働への移動である。

通信者――雇傭者の指摘する斯の如き勞働者の主なる移動は、種々なる場所に於ける勞働者雇傭條件に對し多少なりとも根本的な影響を與へるものである。これ等の移動の意義を最も明かに考察する爲に、この移動に對し勞働者の出入する種々なる方面に於ける勞働賃銀に關する資料を對照することとしよう。吾人は歐露の三八縣に制限し、勞働者の移動性質によりこれ等

の縣を六部類に區分すると、次の如き資料を得る。(註。爾餘の諸縣を除いたのは、資料を以て記述を複雜にしない爲である。それ等の資料は、この研究問題に就いては、何等の新らしいものを提供しないのみならず、爾餘の諸縣は、勞働者の主要な多數の移動以外に立つてゐるか、(ウラル、北方)或は人種上、行政法律上特殊な地方であるか(バルチック沿岸諸縣、猶太人居住諸縣、白露諸縣及びその他)である。前記引用出版物の資料。勞働賃銀の數字——縣別平均。人足への夏期の賃銀——蒔附、刈入、收穫三期間の平均賃銀。(一—六)地帶へ入つてゐるのは、左の如き諸縣である。(一)タウリーツ、ペッサラビヤ及びドンの諸縣、(二)ヘルソン、エカテリノスラフ、サマラ、サラトフ及びオレンブルグの諸縣、(三)シムビルスク、ヴォロネーヂ及びハリコフの諸縣、(四)カザン、ペンザ、タムボフ、リャザン、トゥーラ、オリョール及びクールスクの諸縣、(五)プスコフ、ノヴゴーロド、カルガ、コストローマ、トゥヴェーリ及びニゼゴーロドの諸縣、(六)ペテルブルグ、モスクワ、ヤロスラーヴリ及びウラヂーミルの諸縣。)(譯者註。四五五頁の表參照)

この表は、勞働力の爲の國內市場を造る所の、從つて資本主義の爲の國內市場をも造る所の

勞働者移動の性質による諸縣地域

	平均勞働賃銀（一八八一―一八九一の十年間）						勞働者の移動程度	
	年雇作業者の給費なきもの	年雇作業者の給費あるもの	全支拂に對する金錢支拂の割合	期限雇傭（夏期の）作業者の留	食費持夏期雇人足の留		農業の	農業の
	ルーブリ						外來者	出稼者	外來者
一、農業外來者の最も多い地域	九三、〇〇	一四三、五〇	六四、八%	五五、六七	八二	勞働者約百萬人	—	—
二、農業外來者が最も多く出稼者の少ない地域	六九、八〇	一一一、四〇	六二、六%	四七、三〇	六三	勞働者約百萬人	僅かの數	—
三、農業出稼者が多く外來者の少ない地域	五八、六七	一〇〇、六七	五八、二%	四一、五〇	五三	僅かの數	勞働者三十萬人以上	僅かの數
四、出稼者の最も多い地域その大部分は農業出稼であるが非農業出稼もある	五一、五〇	九二、九五	五五、四%	三五、六四	四七	—	勞働者百五十萬人以上	僅かの數
五、非農業出稼者が最も多く農業外來者が少ない地域	六三、四三	一一二、四三	五六、四%	四四、〇〇	五五	僅かの數	極めて僅か勞働者約百二十五萬人の數	—
六、非農業出稼者が極めて多く農業外來者も相當に多い地域	七九、八〇	一三五、八〇	五八、七%	五三、〇〇	六四	極めて多數	極めて僅かの數	（首都へ）
						可成り多數、鑛業地域へ	僅かの數	極めて多數

過程の根本を吾人に明示するものである。資本主義的關係に於て最も多く發達した二大重要地域は、多數の勞働者を引きつけてゐる。それは、農業資本主義地域（南部及び東部邊境地）と工業資本主義地域（首都の兩縣及び工業諸縣）とである。勞働賃銀の最も低いのは、出稼地域、即ち中央農業諸縣である。これ等の諸縣は、農業に於ても工業に於ても、資本主義の最も少なく發達した地域である。（註。斯く農民は最も家長的な經濟關係を有し、最も多く仕上仕事が保存せられ、最も幼稚な工業形態の保存されてゐる土地から、『組織』の完全に破壞された土地へと續々逃げ出すのである。彼等は背後から追ひかけて來る『社會』の聲のホールを聞かずに、『國民經濟』から逃げ出しつゝある。所が、このホールには明かに二つの聲が聞かれる。『僅かに縛られてゐる！』と、暗黑派のソバケヴィチは脅すやうに叫んでゐる。『分讓地により十分に保證されてはゐない。』と、カデットのマニーロフは慇懃に彼の言を訂正する。）外來者の地域に於て、勞働賃銀は勞働の有ゆる種類によつて高められ、全支拂に對する金錢支拂關係も高められる。即ち自然物經濟より金錢經濟の方が盛んになるのである。外來者の最も多い地域（勞働賃銀の高い）と出稼の地域（勞働賃銀の低い）との間に立つてゐる中間的地域は、前に擧示したやうな

勞働者の相互交代を示してゐる。即ち勞働者は非常に多く出稼に行く。その結果、出稼の後の場處には、勞働者の不足が生ずる。そして勞働賃銀の最も『安い』諸縣からの外來者が此處へ引き寄せられる。

本年、吾人の表には、住民が農業から工業へ脱出して行く二方面の經路が示されてゐるが、この經路(住民の精工業化)と商工業的資本主義的農業に發達(農業の精工業化)とは、資本主義社會の爲に國內市場を組織する問題に關して上述した所を悉く要約反復するものである。資本主義に取つての國內市場は、農業と工業とに於ける資本主義の並行發達と、(註。理論的經濟學は、既にとつくの昔にこの單純な眞理を決定した。マルクスは卒直に農業に於ける資本主義の發達を『工業資本に取つて國內市場』を造る過程として指摘してゐるが、(Das Kapital, I₂, S. 776. 第二四章第五節)もうマルクスのことは言はず、アダム・スミスを引證しよう。『國民の富』第一卷第一一章に於て、それから第三卷第四章に於て、彼は資本主義的農業の發達の最も特質的な要點を指摘し、この過程と都市膨脹過程並に工業發達の過程とが並行してゐることを喝破した。)一面農業企業家並に工業企業家階級の形成と、他面農業雇傭勞働者並に工業雇傭勞働者階

級の形成とによつて形造られるものである。勞働者移動の主要潮流は、この過程の主要形態を——然しながら決してその過程形態の凡てゞはない——示してゐる。即ちこの迄書いて來た通り、この過程形態は、農民經濟に於ても、地主の經濟に於ても種々異つてゐる。商業的農業の種々なる地域に於ても異つてゐる。工業の資本主義的發達の種々なる階級に於ても異つてゐる。

この過程が、我國の民衆主義的經濟學の代表者によつて、如何なる程度迄曲解され、混亂されてゐるかと云ふことは、エヌ——オン氏の『概觀』第二部第六節に特に明瞭に示されてゐる。この第六節には、『農業住民の經濟狀態に對する社會的生產力の超過割當の影響』と云ふ有名な表題が附されてゐる。エヌ——オン氏はこの『超過割當』を次の如く見てゐる。『……資本主義的……社會に於て、勞働の生產力が增大する毎に、その後に從つて起つて來るものは、或る他の勞銀を自分の爲に求めることを餘儀なくされる勞働者の或る相當の數が『解放』されることである。所が、これは生產の凡ての部門に於て行はれるが故に、そして斯の如き『解放』は、資本主義社會の全上層に於て行はれるが故に、彼等はまだ失つてゐない所の生產の道具に、即ち土地に向ふ

より外に活路を見出すことが出來ない。』（一二六頁）……『我國の農民等は、土地を失つてゐない。それ故に彼等はこの土地に自分の力を注ぐのである。彼等は工場に於て仕事を失ふか、或はその補助的な家庭職業を放棄せしめられるかすると、更に盛んに土地を利用する以外にその活路を見出すことが出來ない。凡ての自治會統計集は、耕地擴大の事實を證明してゐる。』……（一二八頁）

これで分る通り、エヌ――オン氏の知つてゐる資本主義と云ふのは、全然特別なもので、そんな資本主義は何處の國にも如何なる時代にもなかつた。經濟派――理論派の一人でさへ、斯んな資本主義を思ひ浮べることは出來まい。エヌ――オン氏の資本主義は、住民を農業から工業へ拔き取らない。農業家を反對の階級に分裂せしめないばかりか、寧ろ全くその反對で、資本主義は勞働者を工業から『解放』する。勞働者等には土地に向ふ以外に何ものをも殘されてゐないのである。それは、『我國の農民等が土地を失つてゐないからである』！　資本主義發達の全階程を詩的に亂雜に、そして獨創的に『分解する所の』この『理論』の基礎に横はつてゐるのは、一般的民衆主義的な、而も前記の叙述に於て詳細に解剖された正直な研究方法である。即ち農民

のブルジョアと農村プロレタリアートとの混同、商業的農業生長の無視、『國民的』『家内工業的營業』が『資本主義的』『工場制工業』から引離されることに就いての物語を、工業に於ける資本主義の連續的形態と多様の表現との分解の場所に置き換へることなどがそれである。

五　邊境地方の意義。國内市場か國外市場か？

吾人は第一章に於て、資本主義に取つての國外市場問題と生産品の實現（レアリゼーション）問題とを結び付ける理論の誤りであることを指摘した。（三三頁以下）資本主義に取つて國外市場の必要を説明するものは、決して國内市場に於て生産品を實現することの不可能ではなく、資本主義が從來の程度に於て不變の條件の下に（資本主義前の經濟制度時代にはさうであつた。）同一の生産過程を反復し得ないと事ふ事情と、資本主義が從來の經濟單位の古く狹い限界を越えて行く所の無際限の生産膨脹に必ず到達するものであると云ふ事とである。資本主義に固有の不均等な發達の下に於て、生産の一部門は、他の部門を追ひ越し、經濟關係の舊地域の限界から脱出しようとする。改革以後の時代の初期に於ける織物精工業を一例に採つて見る。この織物精工業

は、（工場へ移り始めた粗工業は）資本主義關係に於て極めて高い發達を遂げると同時に、中央ロシアの市場を完全に支配した。然しながら斯く迅速に生長した大工場は、最早從來の市場範圍に滿足することが出來なかつた。工場は更に遠く、即ちノヴォロシアや東南ザヴォールヂエや北部カフカズや更にシベリアなどに植民した新住民の間にも市場を探し始めた。大工場が舊市場の範圍以外に出ようとする傾向を有つてゐることは、疑ひない。では、これはこの舊市場となつてゐた地域に於て、織物工業生産品が、一般に多量に需用され得なかつたことを意味するものであらうか？　それとも、例へば、工業諸縣や中央農業諸縣の如きが、最早一般に多量の工場生産品を消化し得ないのだと云ふことを意味するものであらうか？　いや、さうではない吾人は農民社會の解體と商業的農業の生長と精工業住民の增加とが、國內市場との舊地域とを擴張し續けて來たし、また續けつゝあることを知つてゐる。然しながらこの國內市場の擴張は、多くの事情によつて（主に農業的資本主義の發達を阻止する舊弊な設備を保存することによつて）阻止される。そして工場主等も勿論國民經濟の他の部門がその資本主義的發達に於て、織物精工業に追ひ付くことを豫期しないやうになる。工場主等には、直ちに市場が必要で

ある。そして若し國民經濟の他の方面の舊弊が、舊地域に於ける市場を壓縮するならば、彼等工場主は他の地域に於て、若くは他の方面に於て、若くは舊方面の植民地に於て市場を探すであらう。

然しながら、政治經濟的意味に於ける植民地とは、何であらうか？　既に前にも指摘した如く、マルクスによると、この植民地なる概念の根本的特徴は、左の如きものである。（一）自由な空地があつて、移住者が容易にこれを手に入れることが出來ること。（二）複雜な世界的分業と世界的市場があり、これによつて植民地が農業產物の多量生產に於て專門化され得ること。農業產物に對し交換的に工業既製品を入手し得ること。『事情さへ變れば、植民自身も、斯の如き工業製品を造り得るのである。』（第四章、第二節の註參照）歐露の南部及び東部邊境地方は、改革以後の時代に植民された土地で、丁度前記の如き特徴を有し、經濟的意味に於て、それ自體中央歐露の植民地となつてゐるが、このことに就いては、既にその場所に於て述べて置いた。（註。『……特にそれのお蔭で、この國民的生產形態のお蔭で、またこの形態を基礎として、南部ロシア全體は植民され、移住されたのである。』（エヌ――オン氏著『概觀』二八四頁。）『國民的

生産形態』と云ふのは、何と云ふ驚くべく廣く、そして内包的な概念であらう！この概念は、家長的農民的農業であらうが、請負勞働であらうが、幼稚な手工業であらうが、小商品生産であらうが、吾人がタウリーツ及びサマラ兩縣に就いての資料によつて既に瞥見した（第二章）農民土地共有村内の典型的資本主義關係であらうが、何でもかでも勝手に網羅するものである。）この植民地なる概念は、他の邊境地方、例へばカフカズの如きに對して更によく當て篏る。ロシアがカフカズを經濟的に『征服』したのは、政治的征服以後であるが、この經濟的征服は、今なほ完了してはゐない。改革以後の時代に於て、一面にはカフカズの植民が盛んに行はれた。移民等は、廣く土地を開墾して、（特に北部カフカズに於て）大麥や煙草を賣り出し、多數の農村雇傭勞働者をロシアから誘引した。他面には、數世紀に亙る土人の『家内工業的』營業に對する壓迫が行はれた。そしてこれ等の營業は、輸入されたモスクワの工場製品との競爭に於て壓倒されつゝある。舊式の小銃製造も、輸入されたトゥーラ及びベルギイの製品との競爭に於て壓倒された。家内工業的な製鐵業も、輸入されたロシアの製品との競爭に於て壓倒された。また銅、金銀、粘土、獸脂及び曹達、皮革及びその他の家内工業的加工業も同樣壓倒された。これ

等の生産品は悉く、カフカズにその製品を送り出した所のロシアの工場に於て、より安價に生産されたのである。グルヂアに於ける封建制度とグルヂアの歴史的饗宴とが沒落した結果、角による盃製造も沒落した――アジア式の衣服が、ヨーロッパ式の衣服に代つた爲に、製帽業も沒落した。初めて販賣され出すと(樽詰製酒業を發達せしめつゝ)更にロシアの市場をも征服した土地の葡萄酒を入れる革製の德利と酒瓶との製造も沒落した。斯くしてロシアの資本主義は、カフカズを世界的商品流通の中に引込み、カフカズの地方的特色を――古い家長的蟄居性の殘骸を――平坦にし、自分の工場の爲に自から市場を造つた。改革以後の初期に餘り移民されなかつた地方は、若くは世界經濟以外に、または剩へ歴史以外に立つてゐた山地の住民の移住した地方は、重油業者、葡萄酒販賣者、大麥や煙草を精製する工場主等の地方と化した。紳士のクーポン氏も傲然たる山地の住民にその詩的な國民的衣服を脱いで、ヨーロッパの下男の着る衣服に着換へさせた。(グレーブ・ウスペンスキイ)盛んなカフカズ植民の過程及びカフカズの農業的移民の盛んな生長過程と並んで、更に(この生長に蔽はれて)住民の農業から工業への脱出過程も行はれた。カフカズの都市住民は、一八六三年の三十五萬人から、一八九七年の九十萬ま

でに膨脹した。（カフカズの全人口は、一八五一年から一八九七年までに九五％も膨脹した。）これと同様のことが、中央アジア、シベリア及びその他に於ても行はれたし、また行はれつゝあると云ふことを附け加へる必要はない。

斯くして、國内市場と國外市場との境界は、何處にあるのであらうか？　と云ふ問題が、自然に生じて來る。國家の政治的境界を採れば、餘りに機械的解決になり過ぎる。而もそれは解決であらうか？　若も中央アジアが國内市場で、ペルシャが國外市場であるならば、ヒーワやブハラは何處へ屬せしめたものであらうか？　若しシベリアが國内市場で、支那が國外市場であるならば、滿洲は何處へ屬せしめたものであらうか？　斯の如き問題は、重大な意義を有つてゐない。重大なのは、寧ろ資本主義がその國家圈内を不斷に擴張せずに、新地方を植民せずに、それから古い非資本主義地方を世界經濟の渦中に卷き込まずに存在しまたは發達し得るものではないと云ふことである。資本主義のこの特質も、改革以後のロシアに於て、大なる力を以て現はれて來たし、また現はれ續けてゐる。

それ故に資本主義の爲の市場形成過程は、二方面から成つてゐる。即ち一面は、資本主義の

奥への發達である。即ち或る一定の蟄居した領域に於ける資本主義的農業と資本主義的工業との將來の發達である――そして他面は、資本主義の横への發達である。即ち資本主義國の圏内を新領域へ擴めることである。吾人は本勞作の計畫に從ひ、殆んど單に市場形成過程の第一の方面だけを述べることに留めた。從つて吾人は市場形成過程の他の方面が、極めて重要な意義を有してゐることを茲に指摘することを特に必要と認める。然し地方植民過程とロシアの領域擴張過程とに就いて、幾分でも完全な研究をするには、特別の勞作を要する。それで吾人はロシアが他の資本主義國と比較して特に有利な事情にあることを茲に指摘するだけで澤山である。それは、ロシアの地方に植民し得る自由な空地が豐富にある結果である。(註。本文に於て擧示した事情は、矢張り他の方面をも有つてゐる。資本主義が昔から移住されてゐる古い領域に於て深く發達して行くことは、邊境地方植民の結果阻止される。資本主義に固有し、資本主義によつて生み出される矛盾の解決は、資本主義が容易に廣く發達し得る結果、一時延期されてゐる。例へば、最も進んだ工業形態と半ば中世紀的な農業形態との時を同じうする存在は、それ自體疑ひもなく矛盾を成し立てゐる。若しもロシアの資本主義に取つて、既に改革以後の初

期に占められてゐた領域の境界外にまで擴がりやうがなければ、資本主義的大精工業と農村生活に於ける無用の設備との間に於けるこの矛盾は、(農民を土地に縛りつけることは、)迅速にこれ等の設備を完全に變更することに、ロシアに於ける農業的資本主義の爲に完全に路を清めることになるべき筈である。然しながら植民された邊境地方に(工場主の爲に)市場を探し、且つ發見することの可能は、即ち(農民に取つて)新らしい土地へ出稼をする可能は、この矛盾の鋭利さを弱め、その矛盾の解決を遲延させる。從つて斯の如き遲々たる資本主義の生長は、勿論近き將來に於ける資本主義の更に大なる生長と更に廣い生長とを準備するに等しいものである。)吾人は最早アジア・ロシアのことを言はなくとも、歐露に於て——距離が非常に遠く交通が不便である爲に——經濟關係に於て中央ロシアとまだ極めて薄弱に結びつけられてゐる所の邊境地方を有つてゐる。『極北』なるアルハンゲリスク縣を一例に採つて見る。この縣内に於ける無際限の空地と天然の富源とは、まだ極めて僅かの程度に利用されてゐるに過ぎない。土地の主要産物の一なる材木は、最近まで主にイギリスへ仕向けられてゐた。それ故にこの關係に於て歐露のこの地點は、イギリスに取つての國外市場で、ロシアに取つての國内市場ではなか

つた。勿論、ロシアの企業家等は、アルハンゲリスクまで鐵道の開通を見た今日でもなほイギリス人を羨やんでゐる。ロシアの企業家等は、邊境に於ける工業の種々なる部門に『精神的勃興』と企業的活動とを豫見して喜んでゐる。

六　資本主義の『使命』

なほ結論に於て吾人の爲に殘されてゐることは、文獻に於ける所謂資本主義の『使命』、即ちロシアの經濟的發達に於ける資本主義の歴史的役割問題に就いて總決算を行ふことである。この役割の進歩性を承認することは、(吾人がその事實的叙述の各階段に於て、詳細に擧示しようと努めた通り) 資本主義の消極的暗黑面を完全に承認し、資本主義に必ず固有してゐる深く、そして多方面的な社會的矛盾、即ちこの經濟制度の歴史的過渡的性質を解剖する矛盾を完全に承認することとなる。民主々義者等は、資本主義の歴史的進歩性を承認することが、資本主義の辯護者(アポロヂスト)となる意味であるかの如くに全力を擧げて、無駄骨を折つて問題を考へてゐるが、この民衆主義者等は、ロシアの資本主義の最も深刻な矛盾を不十分に評價することによつて、

（また時々は沈默することによつて）罪を犯してゐる。そして彼等は農民の解體や、我國に於ける農業進化の資本主義的性質や、分讓地を有する農村雇傭勞働者並に營業雇傭勞働者階級の形成などを消滅し著名な『家內工業』に於ける低級劣惡な形態の完全なる支配力を消滅してゐる。

資本主義の進歩的歷史的役割は、これを社會的勞働の生產力の高上とその綜合と云ふ二つの簡單な命題を以て要約することが出來る。然しながらこれ等二つの事實は、國民經濟の種々なる部門に於ける最も多樣な過程に現はれてゐる。

社會的勞働に於ける生產力の發達は、大機械精工業時代に於てのみ完全な浮刻のやうに觀察される。資本主義のこの高い階程までまだ手工生產と全く混沌たる途を辿つて極めて遲々と進歩した原始的技術とが保存されてゐた。改革以後の時代は、この關係に於てロシアの歷史の先の時代から截然と區別されてゐる。手鋤と連枷（からさを）と水力製粉所と手廻し織物機とのロシアは、忽ち犁（すき）と穀打機と蒸汽力製粉所と蒸汽力織物機とのロシアに急變した。資本主義的生產に從屬した而もそれ程完全に技術の改造が見られない程度の國民經濟の一部門さへもない。この改造の過程は、資本主義の天性そのものによると、幾多の不均等と反比例との間でなければ進み得な

い。隆盛の時期は、危機の時期に變る。工業の一部門の發達は、他の部門の沒落を招來する。農業の過程は、武る方面に於ては、農業の一面を捉へ、他の方面に於ては、農業の他の一面を捉へる。商工業の生長は、農業の生長を追ひ越す。民衆主義的著作家等の誤謬の多くは、彼等がこの反比例的な飛躍的な短氣な發達を發達ではないとして證明しようと試みたことから發生してゐる。(註。『吾人の見ようとする所は……若し吾人がイギリスを海中に沈めて、その場所を占め得たとするならば、そんな場合に資本主義の將來の發達は、吾人に何物を齎し得るかと云ふ點である。』)エヌ――オン氏著『概觀』(二一〇頁)イギリスとアメリカの綿絲工業は、世界需用の三分の二を滿し、これに從事する者の總數は、僅かに六十萬人に過ぎない。『其處で若し吾人が世界市場の大部分を得たとすると、その場合に於てさへ資本主義は矢張り多數の勞働力を利用することが出來ないに違ひない。資本主義は今不斷に勞働力から仕事を奪ひつゝあるのである。實際、幾ケ月間も何の仕事もなしに坐食してゐる數百萬の農民に比較すると、イギリスとアメリカの六千人ばかりの勞働者など何の意味をなすであらうか。』(二二一頁)

『今日迄歷史があつたが、今はもうその歷史がない。』今日迄織物精工業に於ける資本主義

發達の一歩々々は、農民の解體、商業的農業並に農業的資本主義の生長、住民の農業から工業への脱出、『數百萬の農民』の建築、林業及びその他凡ゆる非農業的雇傭勞働從事、民衆の地方移民、これ等の地方の資本主義に取つての市への轉化などを伴ふ。然しこれ等は皆たゞ今日までの事であつた。が、今ではもうさうしたことは行はれてゐない！》

資本主義による社會的生産力發達の他の特質は、生産需用（生産消費）の生長が、個人需用の生長を遙かに凌駕してゐると云ふ點にある。即ち吾人はこれが農業と工業とに於て如何に現はれてゐるかを一度ならず指摘した。この特質は、資本主義社會に於ける生産品の一般的な實現法則から流れ出で、そしてこの社會の反對的天性と完全に相應じてゐるものである。

（註。生産方法の意義を無視することと、『統計に對する無批判的態度とは、如何なる批評にも堪え得ないヱヌ――オン氏の次の如き斷案を喚起したのである。即ちそれは『加工々業の範圍に於ける全（！）資本主義的生産は、好都合の場合に於て、決して四億乃至五億留を越へない新價値を生ずる。』（『概觀』三一八頁）ヱヌ――オン氏は三分税と賦課税とに關する資料を基礎としてこの計算をしたのである。そして斯の如き資料が『加工々業の範圍に於ける全資本主

義的生産』を網羅し得るものであるか何うかと云ふやうなことに考へ及んでゐない。のみならず、彼は(その言によると)鑛山工業を網羅しない資料を採用してゐる。なほその上に彼が『新價値』に屬せしめてゐるものは、たゞ餘剰價値と可變資本だけに過ぎないのである。我が理論家は、自家消費の物品を生産する工業部門に於ける不變資本が社會に取つて新價値となるのは、生産必要品を製作する工業部門(鑛山工業、建築工業、林業、鐵道敷設及びその他)の可變資本と餘剰價値とに換へられる場合に限ることを忘れたのである。若しエヌ――オン氏が『製造所工場勞働者の數と加工々業に資本主義的に從事してゐる勞働者の總數』とを混同しなかつたら、彼は自分の計算の誤りを容易に覺つたに相違ない。)

資本主義による勞働の一般化は、次の如き過程に於て現はれる。第一に、商品生産の生長そのものは、自然經濟に固有する小經濟單位の細分を破壞し、地方的な小市場を國民的な(次には世界的な)大市場へ引き寄せる。自家用生産は、社會全體の爲の生産に變ずる。資本主義の發達程度が高いだけ、それだけ生産のこの統一的性質と獲得の個人的性質との間の矛盾は、激しくなる。第二に、資本主義は、從來の生産細分の場處に、農業に於ても工業に於ても、從來見

ながつた所の生産の集中を造る。これは、討檢して來た資本主義の特質の最も鮮かな、そして最も浮刻的な表現であるが、然しながら決してその唯一の表現ではない。第三に、資本主義は從來の經濟組織の離るべからざる附屬物となつてゐた個人的從屬形式を驅逐する。ロシアではこの關係に於ける資本主義の進歩性は、特に判然と示されてゐる。何故かと云へば、生産者の個人的從屬は、我國に於ては獨り農業に於てばかりでなく、加工々業に於ても(『工場』と農奴の勞役)鑛山工業に於ても、漁業及びその他に於ても存在してゐたからである。(一部分は今でも存在し續けてゐる。)(註。例へば、ロシアの主要な漁業中心地の一なるムルマンスクの沿岸で、『太古から』實際に『數世紀の間に淨化された』經濟關係の形式となつてゐたのは、『負債勞役制』であつた。この負債勞役制は既に十七世紀に完全に組織され、殆んど最近まで變らなかつた。『主人に對する負債勞役の關係は、たゞ仕事の時だけに限られてゐるのではない。寧ろ主人等は負債勞役者の全生活を自分に引受けてゐる。その代り負債勞役者はその主人に對し永久に經濟的從屬をしてゐる。』(『ロシアに於ける勞働組合資料集』第二部、ペテルブルグ、一八七四年、三四頁)幸ひ資本主義はこの部門に於ても、『自分の歷史的過去に對し輕蔑的態度を持して

るるやうである。』『獨占は……自由な雇傭勞働者を有する資本主義組織の營業に代りつゝある。』(『生産力』五の二一—四頁)自由な雇傭勞働者の勞働は、從屬農民若くは經濟的從屬農民の勞働に比較すると、國民經濟の凡ゆる部門に於て、それ自體進歩的現象をなしてゐる。第四に、資本主義は必ず住民の移動性を作る。この移動性は、從來の社會經濟組織に於ては、要求されなかつたもので、また斯の如き組織の下に於ては、幾分でも廣い範圍に行はれ得ないものである。第五に、資本主義は農業に從事する住民の割前を不斷に縮少し、(農業に於ては、社會經濟關係の最も陳腐な形式が常に支配勢力を有つてゐる。)大精工業中心地の數を增加しつゝある。第六に、資本主義社會は住民の同盟結合の要求を增大し、この結合に從來の結合と比較して特殊な性質を附する。資本主義は中世紀社會の狹い地方的階級的な同盟を破壞し、悲慘な競爭を起すと同時に、全社會を生産に於て種々なる境遇を占めてゐる人々の大部類に分ち、斯の如き各部類の內部に於ける結合に大なる衝動を與へる。(註。『人口調査書』九一頁。註、一九八頁)第七に、資本主義によつて行はれる前記の如き舊經濟組織の凡ゆる變化は、必ず住民の精神的容貌をも變化せしめるものである。經濟的發達の飛躍的性質、生産方法の急激な改造、大なる

生産集中、關係上に於ける個人的從屬並に家長制度の凡ゆる形式の沒落、住民の移動性、大精工業中心地の影響等は――凡てこれ等は、生産者の性格そのものを根底から變化しない譯に行かない。このことに就いて吾人は既にロシアの研究家等の適當な觀察を紹介して置いた。

吾人は常にその民衆主義の代表者等と論戰しなければならなかつたが、彼等の民衆主義的經濟學を見ると、彼等代表者と吾人との見解の相異の原因を左の如く要約することが出來る。第一に、吾人はロシアに於て行はれてゐる資本主義發達過程に就いて民衆派の有してゐる理解そのものと、更にロシアに於て資本主義に先行した經濟關係の組織に關する觀念とを絶對に正しからざるものと認めざるを得ない。のみならず、特に重大なものと思はれるのは、吾人の見地から云ふと、彼等代表者が農民經濟(農業經濟及び營業經濟)の組織に於ける資本主義的矛盾を無視してゐることである。なほロシアに於ける資本主義發達の緩急問題に就いて云ふならば、これは要するに發達を比較する對象の如何によるものである。若しロシアに於ける資本主義前の時代を資本主義時代と比較するならば、(然し斯の如き比較は、問題を正しく解決する爲に必要である。)資本主義の下に於ける社會經濟の發達は、極めて迅速であると認めなければならぬ

ことなる。若しこの發達の速力を一般に技術と文化との現代の水準の下に行はれ得るやうな速力と比較するならば、ロシアに於ける資本主義の斯の如き發達は、實際に緩漫であると認めなければならぬこととなる。而もその發達は、緩漫であらざるを得ない。何故かと云へば、如何なる資本主義國に於ても、舊習による設備をこれ程豐富に、而も完全に保存してゐないからである。これ等の舊習による設備は、資本主義の發達を阻害する。生産者の境遇を一方ならず惡化する。生産者等は『資本主義からも、また資本主義の不十分な發達からも苦しめられるのである。』最後に、民衆派との分裂の最も深い原因は、社會經濟的過程に對する根本的見解の差異にあるのではあるまいか。民衆主義者は、この社會經濟過程を研究する場合、樣々な道德化した結論を下すのが普通である。彼は生産に參加する人々の種々なる部類を、種々なる生活形式の創造者と見ない。彼は社會經濟的關係の全綜合を種々なる利害關係と種々なる歷史的役割とを有つてゐるこれ等の部類間に於ける相互關係の結果と見ようとすることをその目的としてゐない。若しこの書物を書いた者が、これ等の問題を闡明する爲に或る材料を提供し得たとしたら、彼はその勞作が無駄でなかつたと思ひ得る譯である。

附

録

營業番號	作業場の類別		
一	作業場の部	一	一人を有するもの
二	同上	二	第一に同じ
三	同上	三	第一に同じ
四	勞働者一—二人を有するもの	四	第一に同じ
五	第一に同じ	五	第一に同じ
六	第一に同じ	六	第一に同じ
七	勞働者一—二人を有するもの	七	第一に同じ
八	第四に同じ	八	第四に同じ
九	勞働者一—三人を有するもの	九	第四に同じ
一〇	五〇—一五〇の皮革製品を仕上げるもの	一〇	三〇〇—六〇〇の皮革製品を仕上げるもの
一一	六〇—二〇〇の皮革製品を仕上げるもの	一一	二五〇—八〇〇の皮革製品を仕上げるもの
一二	勞働者二人を有するもの	一二	三人の勞働者を有するもの
一三	同上	一三	第一二に同じ
一四	繪畫師及び原型作製師	一四	取引契約品を製造するもの
一五	一—三人の勞働名を有するもの	一五	四—五人の勞働者を有するもの
一六	二—三人の勞働者を有するもの	一六	四人の勞働者を有するもの
一七	一—二人の勞働者を有するもの	一七	三—四人の勞働者を有するもの
一八	二—三人の勞働者を有するもの	一八	四—七人の勞働者を有するもの
		一〇	一〇〇〇の皮革製品を仕上げるもの
		一一	一二〇〇—一七〇〇の皮革製品を仕上げるもの
		一二	四—六人の勞働者を有するもの
		一三	第一二に同じ
		一四	商店向商店を製造するもの
		一五	六人又はそれ以上の勞働者を有するもの
		一六	五人又はそれ以上の勞働者を有するもの
		一七	五人又はそれ以上の勞働者を有するもの
		一八	八—一二人の勞働者を有するもの

一九	一—三人の勞働者を有するもの	四—一一人の勞働者を有するもの	一二人又はそれ以上の勞働者を有するもの
二〇	同　上	第一九に同じ	第一九に同じ
二一	一—三人の勞働者を有するもの	六—一〇人の勞働者を有するもの	一一人又はそれ以上の勞働者を有するもの
二二	同　上	第二一に同じ	第二一に同じ
二三	二—四人の勞働者を有するもの	五—七人の勞働者を有するもの	一三人又はそれ以上の勞働者を有するもの
二四	飾一—二を作るもの	飾三個を作るもの	四個の飾又は太鼓を作るもの
二五	五〇〇宛の皮革製品を作るもの	五—一〇個宛の皮革製品を作るもの	一八—二三個宛の皮革製品を作るもの
二六	一—二人の勞働者を有するもの	六—九人の勞働者を有するもの	一—一八人の勞働者を有するもの
二七	一—三人の勞働者を有するもの	四—九人の勞働者を有するもの	一〇人又はそれ以上の勞働者を有するもの
二八	一—五人の勞働者を有するもの	六—九人の勞働者を有するもの	一〇人又はそれ以上の勞働者を有するもの
二九	網編作業	網編作業及び網織作業	更に大なる同上作業
三〇	一—三人の勞働者を有するもの	四—八人の勞働者を有するもの	九人又はそれ以上の勞働者を有するもの
三一	五—一一人の勞働者を有するもの	一二—一九人の勞働者を有するもの	二〇人又はそれ以上の勞働者を有するもの
三二	七—一〇人の勞働者を有するもの	一—一三人の勞働者を有するもの	一三人以上の勞働者を有するもの
三三	第三一に同じ	第三一に同じ	第三一に同じ
三四	挽物師	指物師	模型製作人
三五	挽台一を有するもの	指物台二—三を有するもの	四人又はそれ以上の勞働者を有するもの
三六	二—五人の勞働者を有するもの	六—九人の勞働者を有するもの	一〇—一六人の勞働者を有するもの
三七	三〇人迄の勞働者を有するもの	三一—一〇四人の勞働者を有するもの	一二〇人又はそれ以上の勞働者を有するもの

號	商業	名稱	數	總數	部類別	數	總數	部類別	總額	部類別	生産額（圓）
一	荷車馬車製造業	坑目製造業（挽物師）	七六	四〇	一一	一一七	四〇	一一	三〇、一〇〇	一	九、五〇〇
二	坑目製造業（挽物師）		四七	一一一	一七	八三	一一一	一七	一三、五〇〇	一	五、三〇〇
三	眼鏡製造業		一一七	一一	八	七	一一	八	一一、九〇〇	一	四、一〇〇
四	指物業		一一七四	一一六	一一六	一一四	一一六	一一六	一一、八〇〇	一	一一、五〇〇
五	鑑製造業		一一一	一一四	一一一	一一一	一一四	一一一	一一、〇〇〇	一	一〇、一〇〇
六	ニヲ（ラ）殺琴製造業（ギタ）		一一九	一一八	一一一	一一一	一一八	一一一	一一、〇〇〇	一	八、〇〇〇
七	坑目（ヤ）製造業（ポルギ）（ストア）製造業（ノスキ）		一四一	一四一	一一一	一一一	一四一	一一一	一一、〇〇〇	一	五、九〇〇
八	鏡製造業		一一九	一一八	一一一	一一一	一一八	一一一	一一、〇〇〇	一	八、〇〇〇
九	油壺製造業		一四一	一一九	一一一	一一一	一一九	一一一	一一、〇〇〇	一	一〇、一〇〇
一〇	皮革製造業（牛革製造業）	皮革製造業（大革製造業）	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
一一	皮革製造業（大革製造業）		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
一二	鑑冶業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	八、〇〇〇
一三	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一〇、一〇〇
一四	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
一五	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
一六	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
一七	鑑業無機質鑑製造業	毛髪製造業	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
一八	鑑製造業	皮革製造業	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
一九	油壺製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一〇、一〇〇
二〇	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
二一	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
二二	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
二三	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
二四	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
二五	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
二六	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
二七	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
二八	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
二九	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
三〇	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
三一	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
三二	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
三三	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
三四	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
三五	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
三六	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
三七	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
三八	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
三九	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
四〇	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
四一	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
四二	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
四三	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
四四	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
四五	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
四六	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
四七	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
四八	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
四九	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
五〇	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
五一	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
五二	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
五三	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
五四	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
五五	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
五六	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
五七	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
五八	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
五九	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
六〇	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
六一	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
六二	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
六三	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
六四	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
六五	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
六六	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
六七	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
六八	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
六九	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
七〇	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
七一	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
七二	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
七三	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
七四	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
七五	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
七六	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
七七	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
七八	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
七九	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
八〇	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
八一	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
八二	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
八三	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
八四	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
八五	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
八六	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
八七	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
八八	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
八九	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
九〇	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
九一	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
九二	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
九三	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
九四	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
九五	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
九六	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
九七	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
九八	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
九九	鑑製造業		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇
一〇〇	鑑製造業（九種業の合計）		一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一、〇〇〇	一	一一、一〇〇

第一附錄の二

雇傭勞働者を有する作業場の數				雇傭勞働者の數				一經營者に對する馬匹の平均數				人夫を雇ひ土地を耕す經營者の割合			
總數	部類別			總數	部類別			總數	部類別			總數	部類別		
	一	二	三		一	二	三		一	二	三		一	二	三
四	—	—	三	七	—	—	六	一、二〇、九	一、三一、九			一	—	—	九
七	—	—	一	一〇	—	—	一	一、二〇、八	一、三二、〇						
一	—	—	一	二	—	—	二								
一六	—	五一	一	四八	—	七	四								
—	—	—	—	—	—	—	—	〇、九	一、〇〇、八	一、〇					
—	—	—	—	—	—	—	—	一、一	一、一	一、一					
五	—	三	二	九	—	四	五	〇、七	〇、六	〇、五	一、四				
三二	三一	三一	一六	八四	三	二〇	六一	一、四	一、一	一、五	二、五				
三四	五二	八		四二	六	二三	一三	二、二	一、七	二、五	二、七				
九九	八	四七	四四	〇二	九	五九	一三四								
八	二	三	三	一三	二	六	五								
六	—	三	三	一六	—	八	八								
一	—	—	—	二	—	二	—	〇、八	〇、七	一、二	〇、六				
二八	三	一七	八	三二	三	二七	一三								
一三	三	一	九	四三	三	二	三八	一、二	〇、七	一、〇	二、三				
六〇二八	一六	一六	一六	一四九	三三	二九	八七								
—	—	—	—	—	—	—	—	一、二	一、二〇、九	一、六					
四	—	一	三	九	—	二	七								
二三	六	九	七	七〇	七	二四	三九	一、一〇、九	一、〇二、一						
一四二	四二	五一	四九	三三四	四八	九〇	一九〇								
												二七、九	九、一三	一三、二七	二七、四

(一)內欄線の零は代用使にもたし。のもの字數も線に內欄『いなの告報査調』はのいなる味意をとこ。ろす

(二)業營は働勞者數の部類別に共傭雇（家族）に順加增の數でのろぬてれさ置配りよに。は業作場に對し一

(三)第一三及び第三三の業營に加工原料品の價格附がれさろぬてれさ製品の價格はそ。ろあでのもたれさ均平に別業營

(四)人夫を雇ひ土地を耕す經營者の割合は一六の業營に關するよに料資ろす。とるよに部類別に一二%がる當に。ろぬてし當相に七五%——〇五%の額

云ふと。(一)四五・四%。(二)一六・七%。(三)二七・三%に當る。

番號	業營	名稱	總數	部類別	總數	部類別	總數	部類別	總數	部類別
二〇	飼料製造業		一三〇	一	一三〇	一	四二、七〇〇	一	四二、七〇〇	一
二一	毛刷製造業		一五〇	一	一五〇	一	一三、〇〇〇	一	一三、〇〇〇	一
二二	乾物製造業		六四	一	六四	一	八、六〇〇	一	八、六〇〇	一
二三	煙草製造業		一三二	一	一三二	一	一四〇、一〇〇	一	一四〇、一〇〇	一
二四	瓦製造業		一三二	一	一三二	一	一四〇、一〇〇	一	一四〇、一〇〇	一
二五	煉瓦製造業		一三二	一	一三二	一	一四〇、一〇〇	一	一四〇、一〇〇	一
二六	皮革製造業		六八	一	六八	一	一一、六〇〇	一	一一、六〇〇	一
二七	皮革製造業（小革製造業）		一一	一	一一	一	一一、〇〇〇	一	一一、〇〇〇	一
二八	玩具製造業（金物製造業及玩具製造業）		一六	一	一六	一	一一、六〇〇	一	一一、六〇〇	一
二九	硝子製造業		五四	一	五四	一	一一、六〇〇	一	一一、六〇〇	一
三〇	繪畫業		三七	一	三七	一	一一、〇〇〇	一	一一、〇〇〇	一
三一	鞄製造業		一四	一	一四	一	一四、〇〇〇	一	一四、〇〇〇	一
三二	角製造業（ピンド製造業角製造業（ピンド市ミトリ口品製造業外アフス口品製造業）		一一	一	一一	一	一一、〇〇〇	一	一一、〇〇〇	一
三三	角製造業（ピンド市ミトリ口品製造業外地帶ドスキイ口品製造業）		一一	一	一一	一	一一、〇〇〇	一	一一、〇〇〇	一
三四	計三三營業の總數		一、〇八五		一、七〇〇		六四、一三〇		六四、一三〇	
三五	五營業の合計（第一等三九）		一〇二		三九		一五、〇〇〇		一五、〇〇〇	
三六	十營業の合計（第一等二八）		八〇四		四二五		一七、〇〇〇		一七、〇〇〇	
三七	陶器製造業		四三九		六八一		一八、〇〇〇		一八、〇〇〇	
三八	硝子製造業		一六一		一七一		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
三九	硝子製造業		一五一		一五一		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
四〇	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
四一	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
四二	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
四三	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
四四	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
四五	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
四六	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
四七	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
四八	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
四九	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
五〇	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
五一	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
五二	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
五三	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
五四	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
五五	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
五六	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
五七	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
五八	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
五九	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
六〇	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
六一	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
六二	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
六三	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
六四	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
六五	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
六六	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
六七	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
六八	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
六九	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
七〇	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
七一	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
七二	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
七三	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
七四	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
七五	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
七六	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
七七	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
七八	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
七九	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
八〇	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
八一	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
八二	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
八三	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
八四	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
八五	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
八六	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
八七	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
八八	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
八九	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
九〇	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
九一	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
九二	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
九三	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
九四	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
九五	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
九六	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
九七	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
九八	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
九九	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一〇〇	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一〇一	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一〇二	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一〇三	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一〇四	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一〇五	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一〇六	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一〇七	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一〇八	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一〇九	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一一〇	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一一一	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一一二	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一一三	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一一四	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一一五	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一一六	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一一七	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一一八	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一一九	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一二〇	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一二一	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一二二	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一二三	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一二四	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一二五	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一二六	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一二七	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一二八	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一二九	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一三〇	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一三一	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一三二	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一三三	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一三四	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一三五	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一三六	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一三七	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一三八	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一三九	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一四〇	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一四一	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一四二	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一四三	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一四四	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一四五	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一四六	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一四七	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一四八	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一四九	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一五〇	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一五一	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一五二	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一五三	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一五四	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一五五	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一五六	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一五七	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一五八	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一五九	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一六〇	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一六一	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一六二	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一六三	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一六四	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一六五	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一六六	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一六七	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一六八	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一六九	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一七〇	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一七一	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一七二	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一七三	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一七四	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一七五	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一七六	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一七七	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一七八	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一七九	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一八〇	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一八一	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一八二	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一八三	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一八四	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一八五	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一八六	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一八七	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一八八	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一八九	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一九〇	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一九一	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一九二	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一九三	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一九四	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一九五	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一九六	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一九七	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一九八	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
一九九	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二〇〇	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二〇一	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二〇二	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二〇三	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二〇四	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二〇五	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二〇六	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二〇七	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二〇八	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二〇九	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二一〇	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二一一	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二一二	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二一三	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二一四	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二一五	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二一六	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二一七	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二一八	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二一九	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二二〇	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二二一	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二二二	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二二三	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二二四	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二二五	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二二六	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二二七	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二二八	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二二九	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二三〇	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二三一	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二三二	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二三三	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二三四	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二三五	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二三六	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二三七	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二三八	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二三九	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二四〇	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二四一	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二四二	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二四三	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二四四	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二四五	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二四六	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二四七	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二四八	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二四九	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二五〇	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二五一	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二五二	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二五三	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二五四	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二五五	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二五六	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二五七	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二五八	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二五九	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二六〇	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二六一	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二六二	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二六三	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二六四	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二六五	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二六六	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二六七	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二六八	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二六九	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二七〇	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二七一	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二七二	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二七三	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二七四	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二七五	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二七六	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二七七	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二七八	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二七九	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二八〇	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二八一	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二八二	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二八三	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二八四	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二八五	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二八六	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二八七	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二八八	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二八九	硝子製造業		一八六		一八六		一一、〇〇〇		一一、〇〇〇	
二九〇	硝子製造業		一八六		一八六		一一、

| | | |

第二附錄　（第七章二二〇頁參照）

歐露に於ける工場制工業に關する統計的資料集

年次	製造業の異つた數に關する資料、但し異つた數に關し年々調査報告のあるもの				三四の製造業に關する資料			
	製造所及工場の數	生産額 單位千留	勞働者の數		製造所及工場の數	生産額 單位千留	勞働者の數	
一八六三	二、八一〇	二四七、六一四	三五七、八三五		—	—	—	
一八六四	二、九八四	二七四、五一九	三五三、九六八		五、七八二	二〇一、四五八	二七二、三八五	
一八六五	二、六八六	二八六、八四二	三八〇、六三八		六、一七五	二一〇、八二五	二九〇、二二三	
一八六六	六、八九一	二七六、二一一	三四二、一七三		五、七七五	二三九、四五三	三一〇、九一八	
一八六七	七、〇八二	二三九、三五〇	三一五、七五九		六、九三四	二三五、七五七	三一三、七五九	
一八六八	七、二三八	二五三、二三九	三三一、〇二七		七、〇九一	二四九、三一〇	三二九、二一九	
一八六九	七、四八八	二八七、五六五	三四三、三〇八		七、三二五	二、三、四五二	三四一、四二五	
一八七〇	七、八五三	三一八、五二五	三五六、一八四		七、六九一	三一三、五一七	三五四、〇六三	
一八七一	八、一四九	三三四、六〇五	三七四、七六九		八、〇〇五	三二九、〇五一	三七二、六〇八	
一八七二	八、一九四	三五七、一四五	四〇二、三六五		八、〇四七	三五二、〇八七	四〇〇、三二五	
一八七三	八、二四五	三五一、五三〇	四〇六、九六四		八、一〇三	三四六、四三四	四〇五、〇五六	
一八七四	七、六一二	三五七、六九九	四一一、〇五七		七、四六五	三五二、〇三六	三九九、三七六	
一八七五	七、五五五	三六八、七六七	四二四、一三一		七、四〇八	三六二、九三一	四一二、二九一	
一八七六	七、四一九	三六一、六一六	四一二、一八一		七、二七〇	三五四、三七六	四〇〇、七四九	
一八七七	七、六七一	三七九、四五一	四一九、四一四		七、五二三	三七一、〇七七	四〇五、七九九	
一八七八	八、二六一	四六一、五五八	四四七、八五八		八、一二三	四五〇、五二〇	四三二、七二八	
一八七九	八、六二八	五四一、六〇二	四八二、二七六		八、四七一	五三〇、二八七	四六六、五一五	
一八八五	一七、〇一四	八六四、七三六	六一五、五九八		六、二三二	四七九、〇二八	四二六、七七五	
一八八六	一六、五九〇	八六六、八〇四	六三四、八二二		六、〇八八	四六四、一〇三	四四二、二四一	
一八八七	一六、七二三	九一〇、四七二	六五六、九三二		六、一〇三	五一四、四九八	四七二、五七五	
一八八八	一七、一五六	九九九、一〇九	七〇六、八二〇		六、〇八九	五八〇、四五一	五〇五、一五七	
一八八九	一七、三八二	一、〇二五、〇五六	七一六、三九六		六、一四八	五七四、四七一	四八一、五二七	
一八九〇	一七、九四六	一、〇三三、二九六	七一九、六三四		五、九六九	五七七、八六一	四九三、四〇七	
一八九一	一九、七七〇	一、一〇八、七七〇	七三八、一四六		—	—	—	

＊初版には一〇八、七七九とあるの。編輯者

註。

（一）、此處に擧げた資料は、改革以後の時代に於ける歐露の工場制工業に關するもので、吾人はこれ等の資料を官廳の出版物中に發見することが出來たのである。即ちその出版物と云ふのは、『ロシア帝國の統計記錄』サンクト・ペテルブルグ、一八六六年、一、――『大藏省調査報告並に材料集』一八六六年。第四號、四月、一八六七年、第六號、六月。――『大藏省年報』第一、第八部、第十部及び第十二部。――『ロシアの工場制工業資料集』商工局發行。一八八五年――一八九一年度。これ等の資料は、殘らず皆その基礎を同一の出所に置いてゐる。その出所とは、工場主や製造所々有者等が大藏省へ申告した報告である。これ等の資料の意義及び價値に就いては、本文中に洋細に述べて置いた。

（二）一八六四年――一八七九年並に一八八五年――一八九〇年度の調査報告を擧げた三四製造業は左の如きものである、木綿紡績業、綿布織業、亞麻紡績業、更紗業製造業、大麻紡績業及び製索業、獸毛紡績業、羅紗製造業、毛織業、絹織業及びリボン製造業、錦繻織業、組紐製造業、金線金箔製造業、編物業、染物業、寶石鑲嵌業、蠟布製造業及び漆塗業、製紙業、壁紙製造業、